



Title	北村季吟の源氏学（二）：附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	詞林. 2015, 58, p. 37-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北村季吟の源氏学（二）

— 附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻 —

宮川 真弥

はじめに

前稿^{〔1〕}より数稿にわたり、『源氏物語』に関する季吟の著述等について概観し、そのうちのいくらかの翻刻を供し、以て季吟の源氏学の再検討を企図しているところである。

前稿では、日本大学総合学術情報センター蔵『古今集并歌書品々御伝受之書』および『源氏物語微意』（以下、『微意』と称する）の基礎的研究を行った。

本稿では、前稿の補足を行うとともに、季吟周辺の『源氏物語』関連書について、個別具体的な調査報告と考察を行うこととする。

一 『十如是和歌集』について

まずは前稿の補足として、『十如是和歌集』の新出伝本の報告を行う。『十如是和歌集』は、『古今集并歌書品々御伝受之書』の一部である日本大学本（以下、日大本と称する）以外

に伝本が知られていなかったが、佐々木孝浩氏^{〔3〕}が日大本以前の形態を留める伝本（以下、佐々木本と称する）を所蔵されており、稿者は幸いに調査の機会を得た。以下に書誌を記す。

佐々木孝浩氏蔵。写本。楮紙袋綴。一冊。縦二三・三糎×横十八・二糎。黄土色無地包み表紙。打付書「為尹卿千首和歌題抄（全）」（左肩）。内題「為尹卿千首和歌題抄」。墨付丁数14丁。遊紙、前1丁。一面概ね十行書、一行十九字程度。

注記を比較すると、佐々木本には頭注が多く、その頭注の一部が日大本で本文化している。佐々木本を訂正増補したものが日大本であるといえよう。

佐々木本の奥書は以下の通りであり、本文と同筆である。

元禄元年十月五日依冷泉中将（為綱朝臣）／御所望抄出
于新玉津嶋菊籬下畢／仙洞御月次和哥冷泉中将出題即此

／千首之題也依之令考之去三日被仰／渡於今出河之亭者也

元禄癸酉のとし（稿者注・六年）此一巻北村氏正立より
／かり得て書写之者也／臘月七日 勝尹

日本本と比較すると、佐々木本は元禄元年（二六八八）の奥書末尾の小書「彼本陸奥紙小本」と季吟の署名、および元禄二年閏正月六日と元禄十五年の季吟奥書を欠く。

佐々木本が元禄二年奥書を有さないことと、日本本の元禄二年奥書に「聊か前後損益」があることと記すことにより、佐々木本から日本本への改訂は元禄二年奥書追加の時点で行われたと推定される。

そうすると、なぜ改訂後の日本本ではなく、改訂前の佐々木本を季吟の次男・正立が所持していたのが問題となる。

季吟と長男・湖春が江戸に召され、京を発つたのは元禄二年十二月十日のことである。当時、大坂にいた正立は、季吟の指示により同月八日に上京している。『北村季任聞書』の「家伝切紙 三鳥之口伝」奥書には、「右師伝之趣授¹与正立生²者也。明十日東行³之節依⁴無⁵寸障⁶而使⁷正立生書写⁸以加⁹二奥書¹⁰而已。」／元禄二年十二月九日 北村季吟（朱印）」とあり、出立間際の九日に季吟から正立へと「三鳥之口伝」が伝えられていることを見ても、忽卒の間の引き継ぎであった

のであらう。改めて書写をする暇もなく、改訂後の『十如是和歌集』は季吟が江戸へ持ち、改訂前のもは京に残る正立に付与されたのではないだろうか。なお、書名が『為尹卿千首和歌題抄』から『十如是和歌集』へと改められた時期については未詳である。

また、佐々木本の元禄六年（癸酉）の勝尹奥書に、正立から借りて書写したとあることには注意を要する。『微意』が季吟から正立に送られた際の書状には「必々よみ聞せ候而、写させ候事有間敷候」とあった。この扱いの差を見るに、『十如是和歌集』については、柳沢吉保に付与する以前には伝授書としていなかったのではないかとの前稿の推定が補強されるよう。なお、勝尹については未詳である。日本本と佐々木本との詳細な比較については、本稿の趣旨からやや逸れるため、別稿を期したい。

二 『湖月抄』の年立に関する「一説」について

ついで、本稿末尾に翻刻した『微意』中巻¹⁰における、年立に関する注目すべき記述について取り上げる。

『源氏物語』の年立では一条兼良の旧年立と本居宣長の新年立が著名である。この二者の間で乙女巻と玉鬘巻との接続の捉え方に相違があることはよく知られている。旧年立が玉鬘巻を乙女巻第三年の翌年と見るのに対して、新年立は同年のことと見るのである。そして、新年立の見解が既に『湖月

抄』に示されていたこともまた知られるところである。『湖月抄』玉鬘巻の端書をやや長文ではあるが引用しよう。

〔花〕此巻は乙女ノ巻に次第をたてば、六条院卅五歳の三月より十二月まで事をいへるなり。〔源氏君の年数諸抄如レ此。〕

愚案ルニ一説ニ云ク、此巻の源氏の年齢卅四歳の九月より十二月までの事あり。乙女ノ巻に卅四歳の八月に六条院移徒の沙汰ありし、其次の九月なるべし。其故は此巻に三月よりの沙汰あるは、玉鬘の君、つくしにての事にて、源氏ノ君の年齢にはかぞふべきにあらず。只此巻に右近初瀬にて玉鬘の君にめぐりあひて、源氏の君に申せし所に、「へかく云は九月の事なりける」と云よりを、源氏の年月にはかぞふべきにや。然ば乙女の巻に秋好の中宮より、紫の上へつかはされし紅葉のかへりごとある胡蝶の巻、翌年源氏卅五歳の春にあたり侍るにや。

問、玉鬘の巻、源氏卅四歳、六条院うつりの年の九月とならば、乙女の巻に明石のうへは、かの巻のすゑに神無月に六条院にわたり給へるよしみえたり。しかるに此巻に源氏ノ君、夕顔上の事を宣ふ所に、「へ北の町にもものする人のなみにはなかみざらまし」との給へり。此巻、源氏卅四歳の九月といはゞ、いまだ明石の上、六条院にうつり給はぬ已前なるべし。しかるに、かく北の町とう

ちまかせての給はん事、如何。

答、明石ノ上、北の町におはすべき事は、乙女の巻に、四まちつくり給ふ時より既に明石ノ上の御かたと定て、「へわれはがほなるは、そはら」などあり。然ばいまだわたり給はぬ已前にも、北の町とうちまかせての給ん事、さもあるべし。

問、此巻を源氏卅四歳といはゞ、若菜の巻の上、源氏四十の御賀の年数にあはせん事、如何。

答、真木柱の巻、諸抄には源氏卅七歳より卅八歳の十一月までといへり。しかれども、玉鬘、男子をうみたまへる十一月の事過て末に、「へ秋の夕のたゞならぬに」といふ詞あり。此詞一年をくはへたるものによ。しからば此説にしたがはゞ、真木柱の巻は源氏卅六七八歳三年の事籠りて、諸抄の説に一年おほくて、わかなの上、源の四十の賀年数相異なるべし。猶哲人の明弁を待而已。

〔湖月抄〕玉鬘巻、端書、1丁オ〜2丁オ

このように『湖月抄』の「一説」は、新年立同様、玉鬘巻を乙女巻第三年の同年とする。そのために生じた旧年立との一年のずれを、『湖月抄』の「一説」は真木柱巻の末に一年を加えることによつて、新年立は帚木巻から乙女巻までを一年ずつ繰り上げることによつて、それぞれ解決したのである。さて、ここで問題にしたいのは、『湖月抄』で「愚按」彼

の一説のごとくならば卅五歳歟(蛩卷、端書、1丁ウ)、「愚按」彼一説の義によらば源氏卅六歳なるべし(藤袴卷、端書、1丁ウ)のごとく言及される、この「一説」の出处である。『湖月抄』玉鬘巻の端書で「一説ニ云ク」と記すことや他の箇所「彼一説にしたがはゞ」(行幸巻、端書、1丁ウ)などと記すことからは、先行諸注からの引用や何人かの講釈によるものとも考えられるため、宣長や先行研究は、『湖月抄』の「一説」では、と慎重に扱ってきた。ここで『微意』中巻、乙女巻の注記181に目を転じると、この「一説」が季吟説であったことが判然とするのである。

おと、此紅葉の御せうそこいとねたけなめり。春の花盛に此御いらへは聞え給へ。

是、来春の花ざかりに此返報はあるべしと也。是、光君卅四歳の九月也。来春卅五歳の三月にこそ此御いらへあるべきを、諸抄にあやまりて卅六歳の春とす。何ゆへにかくはげまし給ふ御いらへの一年を隔つべき。

湖月抄にはじめてこの明る年の源氏君卅五歳の三月なるよしを一説にしるせり。是則正説と用ゆべし。

傍線部「湖月抄にはじめて」「一説にしるせり」とあり、季吟自身が玉鬘巻端書の「一説」を独自の説と認識していたことが明らかである。また、『微意』中巻、玉鬘巻冒頭の注

記182には以下のごとく記される。

花鳥餘情云、此巻は乙女巻に次第をたてば、六条院卅五歳の三月より十二月までの事をいへる也(云々)。是御誤りなるべし。此巻の源氏の年齢、卅四歳の九月より十二月までの事あり。乙女巻に卅四歳の八月に六条院移徙の沙汰有し、其次の九月よりなるべし。猶湖月抄に委ければ略レ之。(後略)

前掲の『湖月抄』玉鬘巻の端書とは、注記の態度が異なることが理解されよう。他にも『微意』真木柱巻の冒頭には「卅八歳の秋までの事有と心得べし。諸抄の義不用之」(中巻、注記255)とあるのに対して、『湖月抄』真木柱巻の端書では以下のごとく「細流抄」と「彼一説」との併記にとどめている。

〔細〕源三十七の十月より三十八の秋までの事あり。但末に十一月にいとおかしきちごをさへいだし給ふとあれは十一月までの事あるか。(孟同義)

〔愚案〕彼一説の義によらば此巻源氏卅六歳の十月より卅七歳の十一月までの事をかきてさて其後に秋の夕のたゞならぬにと書たるに一年をくはへて卅八歳の秋までといふべし。(『湖月抄』真木柱巻、端書、1丁ウ)

『湖月抄』はこのような抑制的な態度と諸注集成的性格とによって、物足りないといふと評されることがしばしばある。しかし、『微意』と『湖月抄』の注記の態度の差を見るに、それは季吟の能力の限界によるのではなく、『湖月抄』の方法ゆえであるといふと改めて認識されるべきではないだろうか。

なお、『湖月抄』では以下のごとく、師説の肩付の後に、「一説」の肩付を付して師説と対立する説を記す場合もある。このような「一説」については、今後、季吟説である可能性をも考慮すべきであろう。

人げなきありさまを

〈師〉空蟬の身を卑下して我かく人げなきさまをうちとけまみえまいらせんもあぢきなくと也。〈一説〉主定りたる身の又源氏にあはん事貞女の道ならねば人げなきありさまとなり。〔湖月抄〕帚木巻、48丁オ、頭注）

三 季吟と『源語秘訣』

続いて、季吟の関与が認められる『源語秘訣』について取り扱う。ただし、既に旧稿に触れるところであるため、本稿では略述にとどめたい。詳細は旧稿を参照されたい。

稿者は、伝季吟筆『源語秘訣』について、無窮会所蔵本と九州大学附属図書館所蔵本の所在を把握している。また、湖

春筆『源語秘訣』⁽²¹⁾が東海大学付属図書館桃園文庫に蔵されている。

それら三本に共通する季吟奥書には「右一冊者以二如庵宗乾伝受之本一令一書写一畢 寛永十九年十月中旬 拾穂（稿者注・季吟）」とある。傍線部「如庵宗乾」は、『湖月抄』凡例に記される季吟の源氏学の師「箕形如庵」と同一人物と考えられる。また、秦宗巴『徒然草寿命院抄』の刊記「慶長九曆 関逢執除姑洗良辰／日東 洛陽 如庵（宗乾）刊行」などに見える開版者「如庵宗乾」とも同一人物と推定される。なお、この開版者「如庵宗乾」は医師であろうと推定されている。⁽²³⁾

さらに、秦宗巴と季吟は姻戚関係にあったとされる。かつ、秦宗巴と季吟の祖父・宗龍はともに曲直瀬一溪（初代道三）門下であり、ほぼ同年代である。

以上のことにより、北村家と秦宗巴、如庵宗乾らによる医師の交流圏が想定される。

ここで、『徒然草寿命院抄』の跋文を中院通勝が記していることと、中院通勝『岷江入楚』を季吟が『湖月抄』で用い、『微意』で参照していることとを併せ考えると、『岷江入楚』入手の経路や使用するに至る経緯もこれらの交流圏に由来する可能性を指摘できよう。これらの交流圏が季吟に与えた影響については今後の講究が求められる。

四 『源氏物語忍草』について

本章では、季吟周辺の『源氏物語』関連書として、『源氏物語忍草』の伝本を報告する。まずは書誌を記す。

洲本市立洲本図書館蔵、柴野栗山旧蔵。写本。楮紙袋綴。四冊。縦二七・八糎×横一九・〇糎。栗皮色無地表紙、打付書「示蒙源語略」(左肩)、貼紙「函三八号/集門二三号/一部四冊/示蒙源語略/津名郡教育会」(中央上部)。各冊四つ目綴じの三つ目の綴じ穴の右下にそれぞれ「春(夏・秋・冬)」と記される。第一冊目表紙のみ、右下に貼紙「奎」、中央に白墨で「源氏物語/の指導書」とあり。

墨付丁数、第一冊77丁、第二冊68丁、第三冊70丁、第四冊75丁。遊紙ナシ。一面概ね九行書、一行二十〜二十二字程度。各冊、巻頭に巻名目録を付す。内訳は第一冊・桐壺/関屋巻、第二冊・絵合/藤裏葉巻、第三冊・若菜/紅梅巻、第四冊・橋姫/夢浮橋巻。

印記、各冊に「柴邦彦図書後/帰阿波国文庫/別蔵于江戸雀林/荘之万卷楼」(陽文朱方印)、「柴氏家/蔵図書」(陽文朱長方印)。

奥書「此よつるときにわかつてる巻は/拾穂軒季吟翁のわらはへの/見やすからんためにとてかきて/おのれにおくれる也/元禄のすゑのとし 広澄」。

洲本図書館本は、正宗文庫本(伝季吟筆)を祖本とする臨模本であり、正宗文庫本が第四冊のみの零本であるのに対し、完本であることに価値が認められる。洲本図書館本第四冊は、正宗文庫本と字詰や仮名の字母まで共通するが、正宗文庫本の扉にあたる部分を欠く。なお、正宗文庫本において本文と奥書とが別筆であるのに対し、洲本図書館本は同筆であることも、正宗文庫本が洲本図書館本の祖本であることの傍証となる。

正宗文庫本については、影印と海野圭介氏による解題が備わるため、以下、本稿では略述にとどめる。

正宗文庫本は、刊本などに見られる跋文の末尾の二首の和歌を欠き、「拾穂軒」、すなわち季吟の号が記される。加えて、前記「広澄」、すなわち住吉具慶の奥書を有し、「住吉/絵所」の蔵書印が捺されている。季吟周辺から住吉具慶に送られたものと考えられ、奥書の解釈によっては『源氏物語忍草』の作者や成立に検討の余地を生じさせる重要な伝本である。ただし、第四冊のみの零本であるため、他本との比較に制限があった。臨模本である洲本図書館本の出現によって、一定程度、その欠を補いうるだろう。

最後に洲本図書館本の伝来について一言しておこう。洲本図書館本は、住吉広行によって柴野栗山へと伝えられた伝本である蓋然性が高い。両者には、共著『寺社宝物展覧目録』がある。同書は寛政四年(一七九二)、柴野栗山・住吉広行が

幕命によって、山城国・大和国の寺社を調査した宝物目録であり、屋代弘賢『道の幸』にもその調査の様子が伝えられている。そのような関わりによって、住吉家に伝わる『源氏物語忍草』を栗山が手にする機会が生じたのだと考えられる。

終わりに

本稿では、『十如是和歌集』『源氏物語忍草』の新出伝本の報告、『微意』の記述による『湖月抄』における年立に関する「一説」が季吟説であることの証明、『源語秘訣』の季吟奥書によって推定される季吟周辺の交流圏についての論述を行った。

次稿では、『微意』全巻の翻刻が出揃うため、それらを踏まえて、季吟の源氏学の一端に言及したい。

注

(1) 拙稿「北村季吟の源氏学（一）」——附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 上』翻刻——（『詞林』第57号、平27・4）。以下、本稿における「前稿」は同稿を指す。なお、前稿に以下の誤りがあった。お詫びして訂正する。54頁上段1行目、誤：此十首之題也、正：此千首之題也。54頁上段5行目、誤：実業卿、正：実業卿。

(2) 請求記号：911.104/K168.9。辻勝美・那須陽一郎「日本大学所蔵『十如是和歌集』について——翻刻紹介・付初句索引——」（『語文』（日本大学）、第123輯、平17・12）、ならびに前稿を参照

された。

(3) 現職は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授。

(4) 元禄二年奥書全文を以下に示す。「元禄二年正月十五日依清水谷黄門（実業卿）御所望之旨、重馳二禿筆於新玉津嶋之梅花下。聊有前後损益一者也。（此本蠟地鳥子八半之小木）。同年閏正月六日、七松処士。なお、この奥書に関連する記述として、季吟「新玉津島後記」（元禄二年二月七日『道のさかへ』）に、「元禄二年閏正月十五日、清水谷中納言（実業卿）の亭にて、詩歌の会に、神祇／たのむぞよ玉津島江のもくづをも／ふかきめぐみのかずにもらすな」（現物未見。以下、『道のさかへ』の引用は『道の栄』（北村季吟大人遺著刊行会、昭37・9）による。39～40頁）とある。

(5) 季吟「橋柱の文台の記」（『道のさかへ』）に、「元禄二年しはすの十日、江戸にまうづるかどですとて、つとめて御社にまいりて、まかりまうしするに、砌の松に雪おもしろく降にければ／出てゆく名残をいとおしめとや／玉津しまわの松のしら雪」（56頁）とある。

(6) 野村貴次「第四章 継ぐべかりし人正立」『北村季吟古注釈集成解説 季吟本への道のり』（新典社、昭58・3、北村季吟古注釈集成別1）に詳しい。

(7) 無窮会蔵、平沼文庫、請求記号：二一〇五九。正立の古今伝授の日時の問題にも触れているため、詳しくは前稿注（10）を参照されたい。

(8) 「北村季吟書簡：北村正立宛」（早稲田大学図書館蔵、請求記号：チ06.03890.0029.0002）。元禄八年五月十二日の書簡である。前稿40～41頁を参照されたい。

(9) 林述齋『新訂寛政重修諸家譜』に見える「勝尹」のうち、生没年からは内藤勝尹が該当しているが、元禄六年には十一歳であり、かつ正立との関わりの有無も判然としない。未詳としておきたい。(10) なお、『微意』中巻には、既に題簽があるにもかかわらず、『源氏物語微意 中』と記す題簽様の紙片が中途に挟み込まれている。この事象の意味を示すところについて現時点では不詳とせざるをえない。諸賢の御教示を賜りたい。

(11) 一例を挙げると、稲賀敬二「第二節 源氏小鑑の類本と成立」『源氏物語の研究 成立と伝流 補訂版』(笠間書院 初版昭42・9、補訂版昭58・10)に、

(稿者注：『源氏小鑑』百十首本系統の伝本に) 少女巻の「心から」の歌の返事が「そのつぎの春」に來たと書いているのは、注目してよい事である。花鳥余情は少女巻について「源氏君三十二歳の三月より三十四の十月までの事」と云い、玉鬘巻を「六条院三十五歳の三月より十二月までの事をいへる也」とする。花鳥余情の考え方でゆけば、胡蝶巻を含む初音少女巻で詠まれた歌の返歌「花ぞの」は、一年へだてて翌々年に詠まれたこととなる。こうなるとこの贈答はまことに間のぬけたものとなってしまふ。湖月抄は玉鬘巻について、

愚案、一説云、此巻の源氏の年齢三十四歳の九月より十
二までの事あり

と云っているが、宣長の「玉の小櫛」は湖月抄の一説などは全く無視して、花鳥余情の年立に代表される立場を「諸抄」とよんで、その欠陥を指摘している。

この少女・玉鬘・胡蝶のつづき方から云えば、湖月抄・宣

長の云う通りであつて、花鳥余情の兼良の説は、贈答の間に三年を要する点で不充分である。しかし同時に花鳥余情以前から、小鑑に見えるような、少女巻末年の翌年を胡蝶巻と次でする年立の考え方があつた事は、右の小鑑の引用文から知りえよう。小鑑の資料的価値を示す一例と申せよう。(228頁)と指摘されるごとくである。

(12) 『湖月抄』の引用に際しては、『源氏物語湖月抄』(新典社、昭52・7・53・7、北村季吟古註釈集成7・17)を用いた。同書の底本は早印本ではあるが、一部に野村氏の操作が加わるため、他の伝本も適宜参照し、異同のないことを確認している。以下、同様である。

(13) 『湖月抄』では年立に関する記述として、「源氏物語年立 上」25丁オ・25丁ウ・29丁オ・31丁オ・31丁ウの頭注、初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱巻の端書、玉鬘巻26丁ウ・27丁オの頭注「かくいふはなか月的事也けり」、真木柱巻39丁ウの頭注「其年の十一月に」、同巻40丁ウ・41丁オの頭注「秋の夕のた、ならぬに」において、「二説」に関する言及が見える。

(14) 以下、『湖月抄』における「二説」の用法を確認する。

ほのめかす

只今とはれまいらせてたのむ心も又物思ひもそふ故に思むすほ、れぬると也。霜はむすほ、るといはん縁語也。(細)なればはとあるを源と小將との事を思むすほ、ると云説あり、いかゞ。たゞ驚かし給ふによりて過半はしほると云なるべし。又一説(孟)荻が返しうらみ申心也。

(『湖月抄』夕顔巻、49丁オ、頭注) ここでは、『細流抄』の肩付の引用「たゞ驚かし給ふによりて」

の後に、「又一説」として対立する『孟津抄』の説を引いている。これにより、先行諸注を引用する際の「別の説」という意味でも「二説」を用いていることが確認できる。

とくまいり給はん事を

〔師〕若宮を具しまいらせて母君にとく参内し給へとそ、のかす也。一説〔抄〕光君をとく内へまいらせ給へと也。

〔湖月抄〕桐壺卷、15丁ウ、頭注

これも同様に対立する説を「二説」として示す例である。ここでは「師説」と対立する説を示している。他に、以下のごとく、「愚案」や師説に「一説」を含む例も見受けられる。

ことつひきひ

〔細〕ことつひは源のかきならし給ふ躰をいへり。花鳥に見えたり。きびうは心得ざる也。いかさまうつくしきかたち也。〔嘩〕花鳥に委。ことつきなどいふ詞あり。琴の躰也。〔花〕狛氏十卷抄云、ことつき、事粒、ことさい、三説あり。つきは人のかほつき也。つびは其姿顔つばみたる物から物々しくけ高く濃にあひたる心也。〔下略〕〔河〕ことつびは其すがた也。〔愚按〕河花に事の字の一説あり。今細、御説琴の義なれば事の義不用。〔後略〕

〔湖月抄〕常夏卷、9丁ウ、10丁オ、頭注

さらにはことなく

〔細〕ことなくは無^ナ事也。難なく沙汰せよと也。〔孟〕葬礼の事を取つくるへの給へど、何か事、々しくすべきぞ、我に任せられよと惟光が申也。〔師〕細孟如此。但一説、更に事なくしなせとは、更にことがましからず、ひそかにしなせと也。さやうにはの給へど、惟光が御前を立を御覧

じて忍びかねてみづからも出だち給ふとの儀也。

〔湖月抄〕夕顔卷、37丁ウ、頭注

(15) 高橋和夫「源氏物語年紀攷」『源氏物語の主題と構想』（桜楓社、初版昭41・2、三版昭55・10。初出、『群馬大学紀要 人文科学篇』第8巻第12号、昭34・6）のように、「旧年立一説」や「湖月抄」に引用する「一説」として、『湖月抄』の「一説」を旧年立の一部とする例もある。

(16) 大朝雄二「第一章 並びの巻攷」『源氏物語正篇の研究』（桜楓社、昭50・10。初出、紫式部学会編『源氏物語研究と資料——古代文学論叢第一輯——』（武蔵野書院、昭44・6）では、『河海抄』の伝本によっては「少女卷末と玉鬘巻」とが同年の記事と理解する読み方のさきがけが河海抄であった」（39頁）と解しうるとする。また、注（11）のごとく、「花鳥余情以前から、小鑑に見えるような、少女卷末年の翌年を胡蝶巻と次でする年立の考え方があった」との指摘もある。しかし、ここでは季吟自身が自説を如何に捉えていたかを焦点とした。

(17) 拙稿「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」（『語文』（大阪大学）第104輯、平27・6）。

(18) 無窮会蔵、平沼文庫。整理番号…二二二六四。詳しくは注

(17) の拙稿を参照されたい。

(19) 九州大学附属図書館蔵。請求記号…五四五／ケ／三一。詳しくは注（17）の拙稿を参照されたい。

(20) 「北村家現存遺物目録」（祇王小学校「北村季吟」（昭30・3）による）には、「一、源語秘訣 一冊 同（稿者注…季吟自筆）」（132頁）とあり、昭和三十年頃には季吟自筆「源語秘訣」が北村家に伝存していたようであるが、稿者は所在を確認できていない。

(21) 東海大学付属図書館桃園文庫蔵湖春筆本。整理番号・桃九一八一。詳しくは注(17)の拙稿を参照された。

以下、湖春筆本について、注(17)の拙稿の補足を行いたい。

湖春筆本は、桐壺巻の注記の「又一義云延喜七年法曹の勘状に職制律の【ちやくふくすへき人の喪を聞てかくして挙哀せずは徒罪以下といふは職制律の】文を見るに」(本文は無窮会本に従う)において、【内を欠く。これは「職制律」の間の目移りによる誤脱と推定される。このことから、湖春筆本の親本において、二つの「職制律」が一行を跨いで隣接していたとも想定しうる。その場合、湖春筆本の親本は一行十七〜十八字と考えられ、無窮会本や九大本とは異なる可能性も生じるが、確証はないため、指摘にとどめておきたい。なお、無窮会本と九大本では「又一義」云延喜七年法曹の勘状に職制律／(改丁)のちやくふくすへき人の喪を聞てかくして／挙哀せずは徒罪以下といふは職制律の文／を見るに】のごとく改行されている。

また、稿者は注(17)の拙稿において、湖春筆本の湖春による署名と花押の影印を掲載し、「稿者は該書の他に、湖春の花押の存在を知らない」と記した。その後、「北村季吟・北村湖春書簡…内藤寿軒・乙部勘右衛門宛」(早稲田大学図書館蔵、請求記号・チ06 03890 0029 0005)に同種の湖春の花押を見出したため、湖春筆本の花押が湖春のものであると確認しえたことを、ここに報告する。

なお、湖春筆本は、輿書にも記されるとおり、湖春から内海直重に伝えた伝本である。内海直重に関連する記述として、「新玉津島後記 元禄二年二月七日」(『道のさかへ』)に、「内海直重がもとにて、湖春、春暁月といふことをよみしと語りける翌朝に、

とくおきいで、新玉津島の木のまの月の面白きをみて、彼題を思出て／春はいまひと夜ふたよをしばし猶／かすみてのこれありあけの月」(42頁)とあることを記して、旧稿の補足を終えたい。

(22) そのほか、文禄五年(一五九七)刊『証類本草序例』や慶長四年(一五九九)刊『元亨釈書』の刊記にもその名が見える。なお、いずれも古活字版である。

(23) 川瀬一馬「増補古活字版之研究」(日本古書籍商協会、昭42・

12)、330頁。同書のほか、同「徒然草寿命院抄解説」『徒然草寿命院抄』(松雲堂書店、昭6・6)なども参照されたい。

(24) 「徒然草寿命院抄」と中院通勝との関わりについては、小秋元段「徒然草寿命院抄」写本考(佐藤道生・高田信敬・中川博夫編「これからの国文学研究のために」池田利夫追悼論集——『笠間書院、平26・10』)などに言及がある。

(25) 松本大「湖月抄」の注記編集方法——『岷江入楚』利用と「河海抄」引用について——(『詞林』第54号、平25・10)、ならびに前稿45〜46頁を参照されたい。

(26) 「源氏物語忍草」の諸本については、中西健治編著「源氏物語忍草の研究 本文・校異編 論考編」(和泉書院、平23・1)が詳しい。

(27) 該書の所在について、勢田道生氏のご教示を賜った。記して謝意を表したい。

(28) 実物未見。後述する注(29)の影印で確認した。正宗文庫調査班「正宗文庫目録(五十音順、典籍編)」(調査研究報告(国文学研究資料館)第29号、平21・3)には、書名・「源氏物語梗概書」、配架位置・下1・オ八、仮番・28とされている。

(29) 財団法人正宗文庫・国文学研究資料館・ノートルダム清心女

子大書編『源氏物語中の人々・河海并花鳥余情抄出(中・下)・源氏物語忍草(冬)』(武蔵野書院、平25・2、正宗敦夫収集善本叢書第1期第六卷)。

(30) 季吟と具慶との関わりについては、朝岡興禎『古画備考』(嘉永三年(一八五〇)起筆。引用は『古画備考』(思文閣、明37・6)による)の「三十四 住吉家」(嘉永四年六月八日起筆)に以下の記述がある。

住吉具慶、(七十五ニテ死、先桂舟話)

○季吟ト具慶ト、京ヨリ召出サレシコト、三王外記憲王ノ所ニアリ、

○或人物語、元祿の比、住吉氏に、源氏物語の絵を命ぜらる、仰に其方存寄に叶る達人と、相談いたし、認候様にとの事也、此時北村季吟を吹挙し、京都へ申遣呼下候、五百石を下さる、其節季吟より、源氏総帖の和解を書置る一軸を、住吉におくる、尤自筆也、又宗丹の水さしを送る、右の謝礼なるべし、住吉氏右の一軸を秘して、他見をゆるさず、子が友人鈴木氏、虫干の時、見得たりと語りし、此事を田安殿御聞及、御所望仰下されし御返答に、私には難レ仕上意を伺候而、其上に可レ仕候と申せし故、御一覽はなき也、(見聞私記)

(31) 注(29)掲出書の解題で海野氏は以下のごとく論じられる。

「拾穂軒季吟翁のわらはべの見やすからんためにとてかきておのれにおくれる也」とある部分は、本書の伝領に季吟が関わったことを伝え注目される。この一文は、「わらはべの見やすからんためにとてかきて」と、幼童・婦女女子を対象とした入門書・梗概書の創作意図を示す序文や奥書類に常套的な文辞を含むため、「かきて」の解釈によっては『忍草』の作

者を湖春ではなく季吟と解しているようにも見える。跋文末尾に「拾穂軒」の名が添えられることと併せて、『忍草』の作者についての再検討を迫るようにも思われるが、一方で、文字通り季吟手写の『忍草』が送られたことを記すと読むことも可能である。

いづれにせよ、本書が季吟周辺から直接的に譲渡された伝本であることに相違はなく、その点において本書の資料的価値が減ずることはないが、先に示したように、『忍草』の直接の執筆対象が病を診た医師「をのへうち」であったらしい点、俳諧師周辺の伝称が『忍草』の作者を湖春とする点、他に『忍草』の作者を季吟とする明徴が見あたらない点などから、本書末尾に付記された「拾穂軒」の署名は聊か不自然ではあるが、現時点では『忍草』の作者はやはり湖春であったと考えるべきである。(772-773頁)

(32) 注(29)掲出書の解題において、海野氏は「奥書冒頭の「此よつどきにわかつてる巻」は、当該本の外題に「源氏 冬」と記されることから、本書が本来は春・夏・秋・冬の四分冊で伝えられたことを言うと考えられる」(772頁)と正宗文庫本がもとは四冊からなることと推定された。洲本図書館本が四冊からなることはその傍証となる。

※引用に際して、割書・小書・肩付は◇で、改行は／で示した。字体は通行のものに改め、濁点や句読点、訓点を適宜附した。『源氏物語微意』の注記は翻刻の通し番号で所在を示した。

日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻

【凡例】

一、底本には日本大学総合学術情報センター蔵、北村季吟『源氏物語微意 中』（請求記号：911.104/Ki68/18）を用いた。

一、底本の翻刻に際しては、可能な限り原文のままとすることを原則とし、改行・清濁・誤字・脱字などに操作を加えることはしていない。ただし、字体は適宜通行のものに改め、合字は開き「□」で示し、意の通じない箇所や誤解を与えかねない箇所等には「（ママ）」と傍記した。なお、注記263（63丁ウ）のみ、小書の箇所にさらに小字があるため、「◇」で小字であることを示した。

一、丁移りの際には、行末に「□X丁オ（もしくはウ）」と、丁数と丁の表裏を示した。

一、『源氏物語』の巻名が記される箇所には、行頭に丸括弧囲み数字で巻次を示した。巻名が注記同様、一字下げで記されており、注記に紛れ易いための処置である。ただし、巻名があるべき箇所に記されていない藤袴巻（53丁オ）、藤裏葉巻（67丁オ）については丸括弧囲みで補った。なお、若菜巻は上下に分かたれ、雲隠巻も注記を有するため、巻次は55までとなる。また、注記ごとに通し番号を付し、行頭に示した。これらの番号は上・中・下

巻を通して用いる。

一、その他、備考を「○」で示した。

【翻刻】

（遊紙1丁）

乙女巻

151(21)

此巻ははしめに薄雲女院の御はての事朝顔齋院御染服の事など有て次に夕霧の元服のこと入学のこと等をかかり光君今の御威勢にて一子の官位心のみ、にあるへきを態六位になして大学の道にいらしめ給はんとの事をかきて万人の教子を養ふ道の本意なるへき心はへをかけり柳屯田の勸学の文に子を教ふには必教ゆ教るときはすなはちかならずをこそか也をこそかなるときは必勤むつとむるときは必なる学ぶときは庶人の子も公卿となるまなはさるときは公卿の子も庶人となる

「1丁オ

「1丁ウ

といましめいへる心にもかなひて
殊勝なるしわざ也心をとゝめ
てみるへき巻なるへし

152 たかき家のことしてつかさかうふり

心にかなひ世中さかりにをこりな
らひぬれは学問などに身をくるし
めん事はいと遠くなん覚ゆへかめる
つかさは官也かうふりは位なり

「 2 丁オ

官位心に任せてよにをこりぬ
れは学問に身をくるしむること

は迂遠に覚ゆへきと也榊巻
に大宮の御せうとの藤大納言

の子の頭の弁といふか世にあひ
花やかなる若人にて思ふ事な

「 2 丁ウ

きなるへしと有悪后かたの人々
世にあひ思ふ事なきまゝに人の
短をのみうかゝひそしりしあり

さま道なく学問などにうとかり
し二条のおとゝの一家のふるま
ひとは雲泥の心はへなる光君の

詞なるへし

153 かくもんなとしてすこし物の心も

え侍らはそのうらみはをのつから

「 3 丁オ

とけ侍りなんと聞え給ふ

夕霧いまおさなきほとは官位

浅き恨み有とも学に入て仁

義忠孝の道をしりまなはさ

るときは公卿の子も庶人となる

ことはりを心得給は、其うらみは

とけんともまことに此源氏の

詞は世中の父子の道の至極の

道理なるへし大宮の詞は婦人

の仁とて其子のためにかへりて

悪きわざ也彼勸学文に父母

其子を養ひて教さるはこれ

154 かしこにてはえ物習ひ給はしとて

しつかなる所にこめ奉り給へる也けり

大宮の御方にてはあまりに御寵

愛なれば学問えし給はしとて二条

院の東院に局を作りてこめ置

て偏に学問をはけましめ給ふと

也是も勸学文の教るときは

必厳也といへるにかなへり

155 いとよくねんしていかてさるへきふみ

ともとくよみはて、ましらひもし

「 4 丁ウ

「 3 丁ウ

「 4 丁オ

厳なるときは必つとむ勤る時
は必成といへる心にかなへりかくて

夕霧の君終にあめのしたのかた
めとなり給ひて六条院のいみしき

御あとをもさのみはあらし果す
太政大臣にもあかり有徳のえ

らひにもかなひ給ふへき君となり
給へり

156 はかせ才人ともところえたり

朱雀院の御時二条の太政大臣の
世をまつりこち給ひし比はかせの

いとまあるよし榊巻にありし
とはかはりたる世のさまなるへし

157 猶うめつほみ給ひぬ

秋好の立后なり人よりさきま

いり給ひしこきてんにもさしこえ
御母かたにてしたしくおはすへき

王女御にもこえて此宮の立后
の事まつは源氏の御心よせかつ

またこきてんは絵合の巻に
御丞を帝にひめて心やすくも

御らんせさせすなやまし聞え
給ひつる事あり女御のわさに

「5丁オ

「5丁ウ

はあらず父権大納言の御心わか
わかしかりしゆへなから此一こと

よろつの事にわたるへし王女
御はち、式部卿宮源氏の君の

すまにおはせし比悪后かたに
心をよせて御とふらひもなくて

紫上もうらめしく思召たる事
など有て人よりすくれ給へかしと

158 おと、太政大臣にあかり給て

梅つほの御幸となりしさま也
薄雲巻に帝の実父なるよし

をしろしめして源氏君を尊敬せ
させ給ふ所にすてに此官にあ

かり給はんあらし有しこ、
にてまことに任したる也

159 いみしうおもひかはしてけさやかに
今もはち聞え給はず

礼記内則篇に七年「シテ男女不レ同セ
レ席ヲ不レ共レ」下モニセ食ヲとあり夕霧十二歳

雲る雁十四歳なるを寵愛にお
ほれてかくひとつ所にて見習ひ

はしめ給ひし故の有さまを書て

「6丁オ

「6丁ウ

「7丁オ

160 おさなき人を養ふ教をかけり
ちかうつかふまつる大宮の御かたの
ねひ人ともさゝめきけり

「 7丁ウ

人の陰ことすましく遠慮ある
へきことのいましめにかけり可付心所也
161 さゝめきことの人々はいとかうはしき
香のうちそよめきいつるはくはさの
君のおはしましつるとこそ思ひつれ

陰ことするは遠慮なき故なれば
又此かうはしき香のするも遠慮
すへき事を遠慮もなく夕霧と

「 8丁オ

おもひて内府としらさりしみな
つゝしむ心なく懈怠の心よりあや
まちたることをかきて万事に
心つかひを懈怠せされとの教を書也
162 お、しうあさやきたる御心にはしつめ
かたし 是内府のかと有てな

「 8丁ウ

たらかならぬ心にて大宮の御
しわさを恨む御心のしつめかたき
と也舜は父こそうの我をころさ
むとせしをたに怨むる心ましまさ
さりき此内府も天下を治る器に
おはします身にて不孝のしわさを

ろかなる有さまをかきて世人の教

とす又前に大宮もさやうの氣
色は御らんすらん物を世になく
かなしうし給ふむまこにてまかせ

「 9丁オ

てみ給ふらんとあり夕霧を大
宮愛し給は、内府もともに愛
し給ふへき事也記ノ内則ニ云曾子曰
孝子之養_レ老也樂_ニシム 其心_ニ不_レ違_ニ其志_ニ是
故_ニ父母_ノ之所_レ愛_{スル}亦愛_ス之_ヲとこそ侍

れ夕霧は源氏の一子葵上のはら
なれば内府もにくみ給ふへきゆへ
なし然ともこきてん梅つほに

「 9丁ウ

后をひきこされ給ふ宿意有て
雲の雁を東宮の御よに出した
て、其残念を晴なんと思給ふこ
との夕霧故にたかふへきにてかく
不礼不孝をもちへりみす物くるお
しきけしきし給ふたとひ夕霧を
今更隔て給ふともいかて其けかれ
をすゝき給ふへきは亦愚なるしわ
さに不孝不慈のとかををかし
遠き慮りおはせぬ有さまなり
さて行末に夕霧昇進し給ひ

「 10丁オ

雲るの雁も中空なるさまにて

もてあくみ給ひて終に藤裏

葉巻にてまけてめあはせ給ひ

つるまことに一朝の怒しつめかた

くて長き悔みと成し有さま前

車のくつかへるは後車のいましめ

そとみせしらする心はへなるへし

163 おと、御けしきあしくて

御母に対して怒れるけしきまた

をろかにあやまれるしわざなり孝

子の有さまはかやうにはあらす

礼記祭義篇曰孝子ノ之有深愛一

者ハ必有二和氣一有二三和氣一者ハ必有二愉

色一有二愉色一者ハ必有二婉容一とこそ

侍れたとひ大宮の御しわざうら

めしき御あやまりとおほすとも親

に對する礼儀にたかへり礼記

内則篇曰父母有レ過下レ氣怡レ色柔

レ声ヲ以テ諫諫メ若シ不スハ入ラ起レ敬ヲ起シテ孝ヲ説

則復々諫ムとこそ侍るなれ世に親

もたる人此内府の不孝のさま遠

慮なきしわざをもとかしく思は、

此礼記のおもむきよく心得て忘る

「 10 丁ウ

「 11 丁オ

「 11 丁ウ

ましき物なるへし

164 猶しつめかたく侍てなんとなみたをし

のこひ給ふ

もとかしくお、しからぬ有さま也

165 さすかにいとおしけれど

いとおしとは思ひながら私心しつめ

かたくて母君に不敬不孝をなす

こと此内府にかきらす世上にま、

あるわざなれはかくかきてみ習は

せて心ある人もとかしとおもは、つ

つしむへしとの心はへなるへし

166 思はずなる事の侍れはいとくちおしうなん

父母之所愛亦愛之の心をしり給は

ぬゆへの御怨み詞もとかしき有さま也

167 かくれあるましき事なれと心をやりて

あらぬこと、たにいひなされよ

十目の見る所十手のゆひさす所

をこそかなる物をいかてかやうの事

あらぬ事といひなすかひの侍らん

是亦まとひはなはたしくをろかな

る御事なり隠れあるましき事と

ならば其上にて思案も遠慮もあ

るへき事なるへし只なたらかに

「 12 丁オ

「 12 丁ウ

「 13 丁オ

て夕霧雲居のおさなきほと

にかゝる事ある聞えよろしからず
は其心かまへはかり有てかくけや
けくはあらたかひの歎き愁へも
なきやうに大宮にも其心むけ

を申てゆくくは其ほいたかえず
とも今の外聞をつくろふへきさま
しめしあはせ給はましかは不孝不慈
のとかもなく光君との御中も

うるはしく万方安全のはかりこと
なるへきを其遠慮おはせずあち
きなかりし有さまに書出てみる

人の教とするなるへしすへて作物語
はかやうに書なさては物のあはれも
興もすくなくてみる人の教にする
故もうすきによりて態かやうにもと
かしくかけるなるへし

168
あないみしや大納言とのに

此めのとの詞すへて遠慮なく軽薄
の有さま也後にも物のはしめの六
位すくせよなど過言して藤裏
葉巻にて浅みとりわかほの菊
を露にてもこき紫の色とかけ

「 13 丁ウ

「 14 丁オ

「 14 丁ウ

きやと夕霧のの給ひしにはち

くるしめる浅はかなる女の有さま也
169 大宮をのみうらみ聞え給ふ
返すく内府の理に迷ひ給へる心

をいふ也めつらしからぬ事なれと
礼記ノ祭義ニ曰曾子曰父母悪レ之ヲソレテ
無レ怨ル「コト」内則曰父母怒テ不レ「シテ」説而撻レ之ヲ流セ「トモ」

レ血ヲ不ニ敢テ疾怨一起敬ヲ起ス孝とこそ侍れ
親をうらむることはり何ことにも
なきとしるへし

170 御いとまゆるされかたきをうちむつかり
給てうへはしふくにおほしめしたるを
しるて御むかへし給ふ

内府のわかくしきの猶改らざる
有さま也帝しふくしに思召御いとま
ゆるされかたきをかくしるてまかて
給ふへきかはかやうの事にて后を
もひきこされ給ひけんとしらせ
たるかきさま也是亦人への示し也

171 おもひのほかにへたて有ておほしなすも
つらくなん 母宮にかやうにおほし
めされ給ふ事もかの一旦のいかりの

「 15 丁オ

「 15 丁ウ

しつめかたき故也すへて人いかる時は

「 16 丁オ

善悪邪正も思ひ分す我意のふる

まひをなして後悔の事誰もあ

るへき也其時くひては何のかひな

しかねて其心を忘すしていかる心

のあらん時はよろつ立帰りおもひ

めくらし思ひしつむへし此内府も日

ころはかくをろかにのみはおはさねと

弘徽殿を梅壺にこえられ雁を

霧にさまたけらるゝとはらたち

いかり給ふ心より不孝不慈不忠君臣

父子の道たえてよろつ心つきなき

有さまなる事をかきて此草子見

る人にしめすものならし

172 始めてたくとも物の始めの六位すくせ

よとつふやく 後生をそるへしと

いふ事有て来者の今にしかさら

むことをしらねは浅官卑位とて

もみたりにあなとるへきにあら

ねと浅き女心にかく放言して

後にはちくるしみし事見ん人

173 きぬのすそをひきならし給ふ

夕霧まめ人におはしけれと猶好

色のふるまひ雲の雁此五節

にかきらす落葉の宮の御こと

なども是亦光君の御あたけを

みならふ所あれはなるへし父の子

を養ふうへに心あるへきわさならんかし

174 くはさの君はかうくるしき道ならても

ましらひあそひぬへき物をと

教則必厳なるこゝろはへなり

175 かへさにわたらせ給ふおとゝももろ

ともにさふらひ給ふ

零落の時を見捨させ給はぬさ

ま哀也悪后二条太政大臣のまゝ

なりし世とはかはれる心なるへし

176 世をたもち給ふへき御すくせはけたれぬ

物にこそといにしへをくひおほす

とかなきを讒し給ひしはての我

身にむくふ有さまみつからも悔

給ふ事を書いて誰も此くひあるへ

ければ人は正直をもとゝして仁愛

177 御賀の事たいのうへおほしまうくる

須磨の比つらく振舞給へる父君

「 17 丁ウ

「 18 丁ウ

「 17 丁オ

なれと猶孝行のめてたき紫

上の有さまを書いて彼内府の母宮

をうらむ事の故に不孝なりしと同卷

にくらへ書て善悪のさまをみする也

178 五月の御あそひ所にて水のほとり
りにさうふうへしけらせて

ほたるの巻かくへき微意也

179 にしのまちは 明石上住給ふへき冬
の御方也只今はいまた渡給はぬ也

180 御はこのふたに色々の花紅葉をこ
きませてこなたに奉らせ給へり

こてふの巻かくへき微意なるへし

181 おと、此紅葉の御せうそこいとねたけ
なめり春の花盛に此御いらへは聞え給へ

是来春の花さかりに此返報は

あるへしと也是光君卅四歳の

九月也来春卅五歳の三月にこそ

此御いらへあるへきを諸抄にあや

まりて卅六歳の春とす何ゆへに

かくはけまし給ふ御いらへの一年

を隔つへき湖月抄にはしめてこの

明る年の源氏君卅五歳の三月な

るよしを一説にしるせり是則正

「 19 丁オ

「 19 丁ウ

「 20 丁オ

説と用ゆへし

玉鬘卷

182(22) 花鳥餘情云此卷は乙女卷に次第

をたては六条院卅五歳の三月より

十二月までの事をいへる也云々是御

誤りなるへし此卷の源氏の年

齡卅四歳の九月より十二月まで

の事あり乙女卷に卅四歳の八月

に六条院移徒の沙汰有し其次の

九月よりなるへし猶湖月抄に委

ければ略之且又此卷は忠孝を

もと、して君臣の道を教とみゆ

183 た、此姫君京にゐて奉るへきことを

おもへわか身のけうをはな思ひそ

是少式か末期に豊後介等の子共

に遺言也此親の心さしを捨かたく

して豊後介も妻子を捨て京に

姫君を具しまいらせし也忠孝の至也

184 神仏こそはさるへきかたにも道ひき給へ

信心いたつらなるましき事を書て

人にしめす也八幡初瀬などに

185 まうて給て其しるし有し事也
またうへにきかたてまつらて

「 20 丁ウ

「 21 丁オ

「 21 丁ウ

右近か心つかひ殊勝也すまの御うつ
ろひの、ち紫上に候する身のこの
上をさしをきて光君にのみ此事を
申上へきことほりなければなり

186 右近を御あしまいにめす

光君かねて玉かつらの行衛を尋
よと仰せをかれしに前に哀なる
人を見てしよしを聞給て其事
にやとゆかしくおほしめすからに
右近に聞給はんとて御足まいり
にとめすなり

「 22 丁オ

187 右近にかたらひてわらひ給ふ

紫上の愛敬つきおかしき御有さま
也さるましき心とみねはあやうしな
とた、にの給は、御たはふれなから
右近か身にとりては迷惑すへしかく
右近にいひて笑ひ給ふ故に右近か
心やすかるへしさに玉かつらの
御事を光君に取分申たらん
を紫上後に聞給てはと遠慮
せし右近か心はへと相かなへり
かやうに有てこそ主従の中
は和合してうるはしく侍へけれ

「 22 丁ウ

「 23 丁オ

188 うへあなわつらはしねふたきに
さきに右近も今聞えさせ侍ら
むとて聞えさし今光君も紫上
に隠さまほしき御けしきなるを
さとく見しり給へるゆへ態ねふ

たきにとて御耳ふたき給へる也
よのつねのさかなき心ある女なら
は隠す事はとりわき聞まほし
くすへき物を是紫上の巨めきて
うらなき有さま也かくてこそ

「 23 丁ウ

189 うへにも今そかの有しむかしの世の
こ、にて終に玉かつらの御事

光君のならひなき御覚にて侍らめ
を紫上に語給ふ也うらなき妹背
の中のみも紫上おとなしやか
にきかぬやうにし給へはとて語り
出給はすは隔給ふになるへければ也
190 北のまちに物する人のなみには
前にも右近か心のうちに故君物
し給はましかは明石の御方はかりの
覚えにはをとり給はさらましと
有しにあひ応したり但こゝに
六条院の北のまちに明石上おはす

「 24 丁オ

「 24 丁ウ

やうなれともこ、はまた九月の
ことにてまつ北の町は明上（マ）のゐ給ふ

へきにてわれはかほなるは、そ原
なとうへなしまうけ給へる故に

かくあらましことに光君の宣ひ

し也実には此十月に明石上は北の

まちに殿うつりし給ふとしるへし

191 その人の御子などはしらせさりけり

六条院に玉かつらを迎へ給ふへ

きなれはまつ内府の御むすめなど

は人にしらせざると也

192 此とくちにいるへき人は

玉かつらのけさう人源氏のむこ

なるへき人などこそいるへけれの心

也蜜兵部卿など猶うちあらぬ（は）

人のけしき見あつめんとおほしめ

す微意なるへし

193 ふこのすけの心はへを有かたき物に

まことに身を捨妻子を捨し

心はへ忠節をろかならぬもの

なれは其功を顕し給ふへき心はへ也

194 人をしたかへことをこふ身となれるは

孟津抄云豊後介孝心有て遺言

「 25 丁オ

「 25 丁ウ

「 26 丁オ

をたかへす忠貞にて玉かつらを京へ
具し奉しにこたへて面目をほと

こしけるなるへし（私）小君か光君

にまめならぬ者なれとしたりしき家

司には猶かそへ給へりしとあるは光

君の人を捨給ぬ仁心をかけり然

ともさして恩賞はみえす右近の

そうはゆけいになり豊後介は

かく此殿中へは出入すへからぬもの、

家司となり有司となりしなど

恩賞にあつかる有さまを書

て人は忠貞なるへき教をいへり

195 山吹のうちきの袖口いたくす、けた

るをうつほにてうちかつけ

貧者貨財を以礼とせずの心を

人にしめすなるへし

196 こたいのうたよみは

是より末摘花の哥の一体に

まつはれてはたらきたるかたな

きをあさけり判し給ふ事を書て

すへて哥読人の教をかけり

初音卷

197(23) 泯江入楚に或説云玉かつらの巻の

「 26 丁ウ

「 27 丁オ

末十二月にきぬくはりとして有し

「 27 丁ウ

其明る正月也二条六条院すみ

分てさらためたる正月也云

此説花鳥等の諸抄の様にかはり

て此巻を源氏君卅五歳といふに

相かなへり尤用ゆへし猶湖月抄

に委

198 みすのうちのをひかせなまめかしく
吹匂はして物よりことけ高くおほさる

「 28 丁オ

人のすみ所うるはしくあらまほしき

教にかけり六条院の御かたく誰

か明石上にをとるへき人おはします

されと此人一人風流心にくき故に

物よりことけ高くおほし年始

の御枕もこゝに定め給へりし由

をかきてみる人の心つかひのため

なるへし

「 28 丁ウ

199 さすかにみつからのもてなしはかしこまり
をきて しつらひはけ高く思ひあ

かりしさま光君の思ひ人姫君の

御母なれば尤さはあるへくしてさ

すかに光君に対する自身のもて

なしは礼儀ある有さま又人の心

200 つかひの見ならはしにかけり
猶したにはほのすきたるすちの心を
是は好色の事にもあらず詩歌

「 29 丁オ

管絃などの風流のかたをいふなり

201 もてしつめすくよかなるうはへはかり
細流云人は実法はかりにても叶ぬ

物也花実を相兼すしてはと也

私家是夕霧をほめ給ふ詞也人の教也

胡蝶巻

「 29 丁ウ

202(24)

此巻は乙女巻にて秋好中宮より
紫上に紅葉をまいらせ給へりし返

報あり尤源氏君卅五歳六条院新

造の翌年なるへし諸抄あやまり

て源氏卅六歳といへり乙女巻の

紅葉奉給ひし又明る年といへるは相違也

203 わか御心にもすくよかにおやかりはつ
ましき御心やそふらん

玉かつら顔かたちすくれ心はせらう

あるに実の御むすめならねは光君

の好色の心にわか物にもとおほ

す也是うき世の人情也然とも夕霧に

も兄弟のよしの給ひていひかはさ

せ給ひ花散里の御方にも御子

「 30 丁オ

のよしの給ひあつけ世上へも其おもむきにて
蛭兵部卿髭黒大将岩もる中将などさへ正しく源氏の御むすめとおもひてをのくいひ寄給へれば今更引かへて密通あ

「 30 丁ウ

るへき道理なし其故におりく忍ひかたくてはたはれなとし給ひつれと終にいさきよく髭

黒大将にゆるして実父の内府にもあらはし給ひ御むすめの数にて御処分なども有し也是たとひ人しれぬこと、ても理にそむき

「 31 丁オ

世の聞えもかたわならん事は忍ひかたきをもよく堪忍ひてすましき事とのいましめを書なるへし

204 すへて女の物つ、みせす心のま、にもの、あはれをもしり顔つくりおかしき事をもみしらむなん其つもりあちきなかるへき

「 31 丁ウ

物つ、みは物をつ、しむ也花とりにつけて懸想するにかるくなひくをいましめ給ふ詞也是なへての女のいましめ也あたにみるへからす細流にねき

ことをさのみ聞けん社こそはてはなけきの森となるらめといふ古今の哥を引り心をつけてみるへし
205 かつはひかくしうけしからぬわか心のほとも思しられ給けり

「 32 丁オ

是玉かつらにたひく忍ひかたき心であらはし給ふといへと実はいさきよき心をもせたる詞なるへし

206 女かやうにもならひ給はさりつるをいとうたておほゆれとおほとかなるさまにて物し給ふ 玉かつら思ひの外なる御有さまをうたて覚え

「 32 丁ウ

給へと上臈しくおほとかにてさまあしからしと思ふ心あるさま也又人のをしへなるへし

207 なつかしきほとなる御そものけはひはいとようまきはしすへしてちかやかにふし給へはいと心うかく忍ひあまり給ふ源氏のしわざに玉かつらの同心のけしきあらはさきに源氏のいましめ給ふ物の哀をも

「 33 丁オ

しりかほつくりおかしきことをも見しらなん其つもりあちき

なかるへきとの給へる心にたかひて
終には浅まれ給ふへし女は男に
もまさりて好色なるへきもの
なるに玉かつら此のちたひく

「 33 丁ウ

の源氏のたはふれにもさまよく
のかれて人の思はんことを憚り過し
て心清くおはせし故に女のほん
にすへしとおと、たち定め
給ふよし真木柱巻にあり偏

208

に女のいましめにかくなるへし
うときもしたしきもむけの親さま
に思ひ聞えたるをかうやうのけしき
のもりいてはいみしう人わらはれに
うき名にもあるへきかな

「 34 丁オ

前にいと心うく人の思はん事も
珍らかにいみしう覚ゆとある
首尾なりよのつねのはかなき女
心は人の思はんことの憚りをもかへ
りみす好色のわさは国中の人
しれぬことなれば不義のわさ
をもなすへきに此玉かつらの心はへ
のちまで遠慮ふか、りし事を
書て女に見習はせんとするへし

「 34 丁ウ

209(25)

蜚巻

いとよくすき給ひぬへき心まとはさ
むとかまへありき給ふなりけり
光君の此しわさまことの友弟

の道にあらす只好色のすさみわ
さなればうたてある御心也けり
と草子の地に批判して後世の

「 35 丁オ

教とするにやすへて吾朝に
中古の風俗世の盛りに榮花
を極めしあまりかへりて王法

の正しき道をとろえつ、上つかた
よりはしめ只好色にのみふけり
て此光君のしわざを万にこの

「 35 丁ウ

210

みしゆへ此物語も其世の風俗に
さまくまさなき事のみ有しに光
君の一人のうへに書なして所々に
其いましめの詞を書添て後人の
心つかひとせしとみるへし
210 ざるはまことにゆかしけなきさまに
はもてなしてはてしとおと、はおほしけり
光君実に玉かつらをわか物と
せんとは思ひ定め給はさると也
わかむすめと披露の、ちある

「 36 丁オ

ましきしわざなれば此物語の
所々にたひく光君此用意

有けるよしを書て侍り是亦

人のかやうの不義のふるまひを

学ひうらやむ事やあらんのこゝ

ろつかひなるへし

211 人の心をやふりもの、あやまちす
ましき人はかたくこそ有けれ

此詞は人の心をもやふるましく

あやまちすましきはかたきとの心

也是前に此宮達をさへさし

はなちたる人伝に聞え給ふま

しき事也かし御声こそおし

み給ふともすこしけちかくたに

こそなといさめ聞え給ひしはすて

に此宮にゆるし給ふやうなる詞

なから実は心見のしわざなりし

事しられたり是亦女のもの

つゝみせず心のまゝに物の哀をも

知かほつくりおかしきことをもみ

しらんなん其つもりあちきな

かるへきといましめ給ひし本意た

かはぬ物なりこゝにて玉かつらの

「 36 丁ウ

「 37 丁ウ

「 37 丁ウ

貞節の心なくは必宮の御けしき
になひく有さまなと有て亦

光君に浅まれ給ふへき所也され

と御みつからはひき入てはるかに

もてなし給ふよしを書て玉鬘の

しわざをほめて後みん人の教とす

212 五日はむまはのおとゝに
乙女巻に五月の御遊ひ所といひ

たりし首尾なり

213 人のうへをなんつけおとしめさま
の事いふ人をはいとおしき物にし給へは

いとおしき物にとは笑止なる事に

おほす儀也人をあしさまにいふ

を用意なしときらひ給ふ心也

是世上のをしへなるへし

214 あなむつかし女こそ物うるさかりせず
人にあさむかれんとうまれたる物なれ

ゑ物かたりは誠はすくなきに玉か

つらの心いれ給へるを益なしと

いさめ給ふ詞也実は彼おかしき

ことをも見しらんなん其つもり

あちきなかるへきといましめ給ひ

しに同意なり亦人の教也

「 38 丁ウ

「 38 丁ウ

「 37 丁ウ

215 すへて何事もむなしからすなりぬや

法華寿量品に諸所言説皆

実不虚といへる心也文句の九卷

湖月抄に委

┌ 39 丁オ

いましめの詞をかけるにつけて
紫式部此草子をかきし心はへ

┌ 40 丁ウ

216 けにたくひおほからぬこと、もはこの

みあつめたまへりけんかし

藤壺臘月夜六条御息所源

内侍などのたくひよにあらゆる忍

すといふ事ともなるへし今作

物語に光君一人の上に書て

人のいましめにせしをわざとかく

いへる草子地也

┌ 39 丁ウ

て書つらね侍らんまことに
君臣父子の道朋友の信菩提

┌ 41 丁オ

217 姫君の御まへにて此世なれたるもの

かたりなとなよみきかせ給ふそみ

そか心つきたるもの、むすめなどは

おかしとにはあらねとか、る事世には

有けりと見馴給はんそゆ、しきや

此をしへ万人にわたるへしひとり

明石の姫君にとのみは思ふへからず

非礼勿視とこそ聖人はいましめ

給へりけれよからぬわさはみるに

つけてをのつから内心うつりて

まさなき物なれば也此源氏君の

┌ 40 丁オ

218 こよなしとたいの御かた聞給は、こ、
ろをき給ひつへくなん 至鬘也

前にまことのわかひめ君をかくし

ももてさはき給はしといへる首尾也

219 もしさやうの名のりする人あらは

近江の君をかき出ん微意也且又

此おと、の心ふか、らぬをいはん

とてかけるなるへし

┌ 41 丁ウ

220(26) 常夏卷

あそんやさやうの落葉をたに

此詞源氏も雲みの事を内府に

申給ふに同心し給はぬをすこしい

きとをりて嘲り給ふ詞也源氏の口

入給ふ事物語にはみえねと行幸

卷に其おもむきはみえたり

221 かゝり火こそよけれどとて人めして

次の篝火巻かくへき心はへ也

222 いとけしからぬ御こゝろなりや

例のいましめの詞なり光君此玉

かつらにかやうの御かまへあるまし

きことなれば也世の人としては

猶あるましき事としらしめんと也

223 まくるやうにてもなひかめ

一旦のいかりに遠慮なく雲みの

雁を渡し給へりしかとほとへてお

ほししつむへれば聊悔しき心出来給へる

さま也世にかやうのたくひおほかるへし

かねて思案あるへき事の教なり

224 ことなる事なき詞をものとやかに

をししつめていひ出したるはうち聞

みゝことにおほえおかしからぬ哥語

「 42 丁オ

「 42 丁ウ

「 43 丁オ

をするもこはつかひつきくしくて

何事もいひなしによりてよくなる

物との教へ也いかに秀逸の哥な

りともおそろしきこゑしていへは無

曲と也此段万事にわたる教也

篝火卷

225(27)

ともあれかくもあれ

内府のしわざの遠慮なきを笑止

に思ひ給ふ心なり湖月抄に委

226 御ことを枕にてもろともそひふし給

前にやうくなつかしううちとけ

聞え給ふと有てこゝにてそひふし

給ふと有然とも実事はなし真

木柱巻に殿もいとおしう人々

も思ひうたかひけるすちを心き

よくあらはし給て我心なからうち

つけにねちけたる事はこのます

かしとむかしよりの事もおほし出て

とあり光君のけさうを玉かつら

もはしめのやうにはおはしまさて

源氏の御心のまゝにをしたちてな

とももてなし給はねは心やすく

てうちとけ給ひての事と知へし

「 43 丁ウ

「 44 丁オ

「 44 丁ウ

諸抄其義を用ゆ猶おくに

うちとけぬさまに物をつゝまし
とおほしたるけしきいとらうた

け也とあり玉かつらの用意あ
るさま也光君にひたすらには

同心なかりし事をしるへし

野分巻

227(28)

あちきなく見奉る 夕霧の紫

上を見給ふ也野分の物さはかしき

まされに人々も心つかひすへき所

にも心つけさりしさま也かやうの

騒動の時一入こゝろすへき教也

228

おほつかなさになん参りて待つる

夕霧学問のしるしに孝ある心也

229

心くるしきにまかて侍なん

六条院はことなる事なく人も

あまたあれは大宮の御方の心

苦しさにまかて給はんと也又孝心也

230

三条の宮と六条院とに参りて御

覧せられ給はぬ日なし

細流云ゆふ霧のつとめたるなり

九条殿遺誠 礼記文王世子等湖

月抄に委 孟津抄云数ならぬ

「 46 丁オ

者までも日々に父を見まふへき事也

231 中将夜もすからあらし風の音にも
すゝろに物哀や 夕霧紫上を思ふ

心也必かやうに思ふへき事なれば
光君の夕霧を疎くならはし

給ふ又いましめ也桐壺の帝の光君

を愛のあまりに藤壺にしたしく

せさせ給へる末のまさなきにて

おもひあはすへし

232

けちかきかたはらさ(マヤ)に立のきさふらひ

人々おもふへき心つかひなり

233

人々けさやかにおとろき顔にはあらねと

中宮の御方の物馴てらうくしき様也

234

こうちき引おとしてけちめみせたるいと

いたし 明石上光君に礼儀あ

るをほめたる也初音巻にみつ

からのもてなしはかしこまりをき

てと有しともし平生の用意とみゆ

235

いとよくみゆかくたはふれ給ふけしき

のしるきをあやしのわざや

源氏玉かつらへのけさうを人にしら

れしとおほし又忍ひくの御こと

なれば人はしらしとおほすらんも

「 47 丁ウ

238

おこかましうもやなとおほしかへさふ
て此巻にあり

「 49 丁オ

240

かのことはおほしなひきぬらんかし
へき故もあるへし

237(29)

行幸巻

初音巻より此巻まで源氏の御
年齢卅五歳とみるへし扱此巻
と野分巻との間に九月十月十
一月等の事はこもりて十二月大
原野行幸の事より書出て次
の年源氏卅六歳の二月の事ま

「 48 丁ウ

「 50 丁オ

236

猶みはてまほしけれとちかゝりけり
とみえ奉らしと思ひて立さりぬ

紫上の御方にてけはひおそろし
くて立ざるにそといひけ近き
かたはらいたさに立のきてさふら
ひ給ふとある心つかひと同じ心を
つくへき事ともなるへし

「 48 丁オ

「 49 丁ウ

239

色くろくひけかちにみえていと心つきなし
美艷の玉かつらけさうの人々おほ

ため人のためよからぬ事はすましき也
おほし忍び難きをよく堪忍てわか
あやまちある事貴賤老少ともに
事の中に殊に男女の道は国中
の人しれぬ事なれば私心に任て
めくらしおほつかなき事は思ひ返し
ほし此思案のやうによく思ひ
てすへからすとの教をかけり万の
たき心也世に一旦の心に任せて遠
慮なくせし事の後悔ある事お
まゝに玉かつらをわか物とし給ひか
とにかくに思案し給ひても思ひの

玉鬘に宮仕をす、め給ふ詞也
次にも猶おほしたてでなとたえす

「 50 丁ウ

す、め給ふとあり此かくす、め給ふも猶玉かつらへけさうの絶ぬ故なり

兵部卿大将などに嫁しては思ふ心かなへかたし宮仕へにては里亭へ

出給はん折も逢見給はんの内意前（前）前にも有しなり

241 心のそらなく 夕霧祖母の御病氣

「 51 丁オ

を見あつかひ給て心のをき所なくおほす孝心をいふなり

242 此中将のいとあはれに

前にこゝろの空なくと有し首尾也
かうくちおしきにこりのすゑに

濁悪世にさはかりす、き給ふほとすむへき水は有かたからんとなり

一たひ夕霧ゆへにけかれ給へる雲
ゐの雁の名はきよめかたからんと也

湖月抄には浪江（浪江）入楚の儀を用ゆ
所好にしたかふへし

244 女官 によくはんとよむへしによ

くはんといふは女御更衣より以下の
宮仕の女の惣名也内侍所等の役

「 51 丁ウ

245 あやしのこと、もや
人をいふにはによくはんと読習也

「 52 丁オ

内府の御むすめの光君へまきれおはしたるをあやしの事ともや

と也其故の御たはふれそと今
彼野分の朝の事を思合給ふ也

246 から衣又から衣く
かやうにおなし詞をたひくよむ

こと哥読の若はあるへき事なれ

247 きげはかれもおとりはらなりと

「 52 丁ウ

は心すへしとの教にかくなるへし
あふなけにの給ふ

近江の君いやしくそたち給ひし
故に万事遠慮なき有さまを書

て誰も遠慮なくみたりならば
亦近江君そと心得のために云なるへし

248(30) 御袖をひきうこかしけり
（藤袴卷）

夕霧のけさうを忍ひかねて顯
はし給ふ也此玉かつらにかく人々の

けさうの事をかくは世上の人情
にてかくさまくのむつかしきこと

あらんにもさすかに人にくからす又

「 53 丁オ

わか貞節をもたて、あへしらふへ
き教なるへし此玉かつらのいらへ
ともものいつれにもくからておも
しろくいひのかれ給へるを女の本と
此巻に書と、めたり心をつくへし
249 かたはらいたければか、ぬなり
夕霧の光君の懸想あるをも

「 53 丁ウ

知らから此女君にたはふれにて
もかやうの有さまあるへき事なら
ねはかたはらいたければとあさけり
てか、すとの心も亦いましめにや
250 此みやつかへをしふくこそ思給へれ
此光君と夕霧の御有さまを見

「 54 丁オ

るに宮のれんし給へる人にていと
心ふかき哀をつくしいひなやまし
給ふに心やしみ給ふらん又うへを見
奉り給てはいとめてたくおはしけり
と思ひ給へりなどの給へる事今の世
の父子のあいたにていふへき事にあ
らす中古此時分の風俗かやうの
ことに憚りなかりしにや又作り
物語にて人のいましめなるへき事
ともをかくによりてかやうにも書

「 54 丁ウ

たるにやはかりかたし
251 年比かくてはく、み聞え給ふける御心さ
しをひかさまにこそは人は申なれ

此夕霧の源氏の御けしきを見
むと思へるも亦此玉かつらに御け
さうの事を人の疑ふなどいふ事

「 55 丁オ

も皆父子の間に思ひいふ事とも
にあらす是亦其比の風俗にて
憚りなかりしさまにや又作物語な
れはかやうに書て人にしられしと
思ひても必よにしられて其か
くれなく沙汰せらる、物なれば
誰もいましむへしとの教に書にや

「 55 丁ウ

252 さりやくく人のをしはかるあんにおつ
ることもあらましかはいと口おしく
あるましき事はいかにつくろはん
とする事も首尾逢かたくまसान
きわさをみつかから思知給ふさま也
253 おほと、御おもむけのことなるにこそ
はあなれまことの親の御心たにたか
はすはと此弁のおもともせめ給ふ
此詞をみるに内府の御心は鬚黒
をと思召によりて終に玉かつらを

「 56 丁オ

254 大将のえ給ふへき心みえたり
女の御心はへに此君をなんほんにすへ
きとおと、たちさため聞え給ひけり

此けさうの人々にもけにくからぬ

物からみつからの貞節たかえす

光君ののかれかたき御有さまに

もさすかに心きよくいひのかれ給ふ

さまの賢く労ありし玉かつらの

ふるまひを世人のか、みといへるは

誠に人の教にかけるなるへし

真木柱卷

255(31)

此卷源氏君卅六歳の正月より

卅七歳の十一月玉かつらの男子を

うみ給へる事など書てさて其

あとに秋の夕のた、ならぬにと

書たるに一年をくはへて卅八歳

の秋までの事有と心得へし諸

抄の義不用之

256

ほとふれといさ、かうちとけたる

御けしきもなく思はずにうきすくせ

也けりと思ひ入たるさまのたゆみなき

是実父おと、など鬚黒にとおも

むき給ふ故に弁のおもと媒して終

「 57 丁オ

「 57 丁ウ

「 56 丁ウ

に玉かつらを大将得給へりけれと玉
鬘の本意ならてうちとけ給はぬ

さまをいへり実父も光君もゆるし

給へる事をた、にかくしふくゝなる

へきいはれなければとも光君の御心も

猶はなれぬさまなるにうちつけに

大将にうちとけ給は、光君へもを

のつから憚りあるへく入内あるへき

御身なるに其恐れもあるへし又

蛍兵部卿など懇にの給ひしあた

りにもさすかにおもふ所有て玉

かつらの心とは大将になひかぬさま

をみせて媒の弁のおもとも疎み

給へるけしきなるへし然とも世と、

もに歎き給へりし光君の懸想

をのかれて世上の疑ひを心清く

はなれ給へれば玉鬘の身にとり

てはさいはるといふへし同し事の

内にも宮仕し給てもこきてん秋

好のは、かりあり又猶源氏のけ

さうのかれかたく又蛍兵部卿など

の風流に美麗なるかたになひき

給ひては玉かつら好色にめて、心

「 58 丁ウ

「 59 丁オ

257

をの かあらんこなたはいと人わらへなるさま
にしたかひなひかても物し給なんと給ひて

となひき給ふに似て光君の御心の
中恐ありて心よからす心つきなしと
みおとし給へりし髭黒に逢給て
かくうちとけぬけしきあれは諸方の
恨みも薄く光君をいとひかてらに
実父のおもむけにしたかふやうならむ
は、かりもなしとかくにらうありい
たりふかき有さまにや奥の巻に
も玉かつらの心とは髭黒にあひ給は
ぬさまにしなし給へるを源氏もほ
め給ひし事あり賢女の有さまを面
白く書出たる作物語のさま奇々妙々

式部卿宮の身の威勢にほころのみに
て短慮におはしますさま也女は三
従の礼有て嫁しては夫にしたかふへ
き物なれば大将のさり給はぬかきり
は御子ともなともおはする中を
引きりに取返し給ふまじき御事也
ことにももの、けに煩ひやつれてたけ
き事もなき北の方なるをや果して
後悔し給へる事を書いて世人の教とす

「 59 丁ウ

「 60 丁オ

258 此おほ北のかたそさかなものなりける

心さかなくあるまじきいましめの詞也
259 はしたなかりしにことつけかほなる
を宮にはいみしうめさましかり歎き給ふ
はしたなく北の方を迎へとりて大

將おはしけるにも出逢給はず姫
君をもみせまいらせすなどありし恨
にかこつけて音信も絶てし給ぬ

を歎き悔み給ふ也是また人のしう
と、して心すへき教なるへし

260 まめたちてさふらひ給へはえおほすさ
まなるみたれ事もうち出させ給はて

是亦玉鬘の貞節あり労ある

さまなるに帝もえ乱させ給は
さると也女の心た、しきにいかて
みたる、たはれ男あらん人の不義
をなすはわかしわさのあたなる故

そと人に教ゆる書さま也且又

玉鬘のふるまひ女の本なる有さま也

261 おしむへかめる人も身をつみて心くるしう
なん 身をつみてとはわか身をつみ
て人の痛きをしる心也君子の
絜矩の道上去にくむ所下に使

「 60 丁ウ

「 61 丁オ

「 61 丁ウ

ことなかれ下ににくむところ上につかふまつる事なかれ前後左右みなしかりこれ天下を平にする要道とかや大学の章句に見ゆ冷泉院を天曆の聖代に

「 62 丁オ

比してかけりといへり薄雲巻にも道々の文を御覧の事ありこ、に此御心つかひあるよしをかき光君を実父としろしめしてより御位をもゆつらんとおほしめし終に尊号を奉り給へる大孝のさま

「 62 丁ウ

262 大王王季を追王せし上古の聖人にもかよひたる書さま又奇妙にやさるもの、くせなれば色めかしう近江君のさま偏に狂言ながら

263 又人の教也つ、しみ思ふへき所也秋の夕のた、ならぬに

「 63 丁オ

此前に其年の十一月にと有てこ、に秋の夕とかける又一年を添て源氏君卅八歳までかけると見るへし前(三)註スルコトシさて梅か枝藤裏葉の巻を過て若菜の巻に光君四十歳にて御賀の事なとあるに年

数たかはさる物也

梅かえの巻

264(32)

かうともはむかしいまのとりならへさせ給て御かたにくはらせ奉給ふ二くさつ、合せさせ給へと聞えさせ給へり

「 63 丁ウ

明石の姫君入内あるへき用意に

薰物を合せ給ふへきことを朝顔の

齋院紫上花散里明石上などへ二

種つ、あつらへ給ふ也かやうにて其人々の御心つかひ其風流なと試

給はんとてなりかく女かたへはたき物

「 64 丁オ

又後に男方へは手本巻物なとあ

つらへ給へり是も其才覚有職の

ほとをこ、ろみ給ふへきとなるへし

よき人はおとこもをんなも其才

覚風流常に嗜むへきための教也

栄耀にほこりてた、に酒宴遊興

にのみか、つらひ文筆藝能をもた

しなまぬをいましめ心付んためと知へし

「 64 丁ウ

265

人のねんころなりしきさみになひきなましかはなと人しれすおほしなけきて

光君の懇に口入給ひし時承引し

給はさりしあやまりを悔み給ふ也物

266 のいきをひ時節時宜心すへきいましめ
かの御をしへこそなかきためしには有けれ
桐壺の帝の賢き御教訓を思出給也

親のいさめはたとひをろかなるにても

「 65 丁オ

子を大切に思ひていふ故に子の
ため後まで悪からぬやうにとて
いふへきをまして賢き親の詞は
一生の規範なるへきを子の若氣
にてしたかはさらんは愚痴放埒
不孝不義数々つみおもきわさ
なるへし此夕霧への教訓万人
の子たるもの、いましめなるへし
よく心をつけてみるへき也

「 65 丁ウ

267 いさ、かのことのあやまりもあらは
かろくしきそしりをやはんと
つゝみしたに 是らの詞をろ
そかにみるへからず随分つゝし
みてたに猶時としてさし出る
私心にひかれてすきくしき
とかをおふ事ありましてつゝ、
しむ心もなき人をや源氏の
朧月夜故すまの愁有し事を
の給へとも是をみる人の万事に

「 66 丁オ

268 わたるへきをしへなり
おと、のくちいれ給ひしにしふねか
りきとてひきたかへ給ふなるへし

源氏君内府に口入給ひしこと

「 66 丁ウ

物語にはみえず所々に其おもむ
きは有し此詞にて慥に口入給ひ
しとみすへきために書出し詞也

269 いかにかにせまし猶やすゝみいてゝ氣色
をやとらまし 此詞次に藤の

うらはの巻を書て雁を霧に

あはせ給ふ事をいはん微意也

270(33) (藤裏葉卷)

なといとこよなくはかうしし給へる
雲の雁を夕霧にゆるし給

「 67 丁オ

はん心をあらはし給ふ詞なり

271 おと、の御まへにてかくなんとて
内府の文を光君に夕霧のみせ

申給ふ也父君への礼儀なり

272 いとかうさくにねひまさる人なり
夕霧を内府ほめ給ふ詞也此巻の

さま乙女卷などのさまとは雲泥の

けしきなりはしめに思案あるへき
ことを一旦のいかりにし損し給へる

「 67 丁ウ

かるくしさを書て人の教とする
なるへし此跡におとゝの御掟の
あまりすくみて名残くつおれ給ひ
ぬるを世人もいひ出る事あらんや
と源氏の給へる詞あり人々兼て
おもふへきをしへなり心をつくへし

「 68 丁オ

273
わかたたけう思ひかほに心をこりし
てすきくしき心はへなともらし給ふな

我に理有て人の屈したる時に

それにほこりて人をなみし過言

などする事あるましきことの

いましめなり万事に渡る教訓なり

274
つみものこるまじうそまめやかなる

御心さまなどの年比こと心なくてねんし

過し給へるなどを有難うおほしゆるす

実法におはする夕霧に難面き

つみをみゆるし給ふと也人忠信を

主とすへきよしの教としるへし

此卷内府の過を改め給へる故に

万事まとかにうるはしく成たり

過則勿憚改との聖言誠なる哉

275
あせちの北方なともかゝるかたにて

うれしとおもひ聞え給へり

「 69 丁オ

乙女巻にて雲の雁のめのと
あないみしや大納言殿にきこし
めさんこともなといひし浅はか
なりし女詞の軽薄なりしを

276
つるにあるへきことのかく隔たりて
過し給ふをかの人も物しと思ひ歎かる

らん此御心にもやうくおほつかなく

あはれにおほししるらん

紫上の此思ひやり仁愛深くおい

らかなる心はせ誠にあまたの中

にすくれ給へる所也他の女心ならば

おさなきより我こそおふしたてたれ

は実母にしたしみあらせしと

殊更にへたて侍らんかしかくお

となしやかにおはする故に源氏の

君もよくおほしよるかなと感し

給ひ明石上も思ふ事かなひて自

得し御中らひあらまほしくなと

していつかたもくまろくふしなく

侍し世上の女見習ん為にかけりと

みゆ

277
あさみとり若葉の菊を露にても

みゆ

「 70 丁オ

「 69 丁ウ

279(34)

あはれなる御ゆつりにこそはあなれ
若菜卷上
蓋_シ天子之孝なりともいへるをや

「 71 丁ウ

281

今はさりともとのみ我身を思ひあ
なと覚給ふほと心のくまはあらんと也

「 73 丁オ

278

あるしの御座はくたれるをせんし
有てなをさせ給ふほとめてたくみえ
たれと帝は猶限あるいやくしさを
尽してみせ奉給ぬ事をなんおほしける
冷泉院の孝の御心也誠や延喜帝
とやらん天子に父母なしとの給はせし
御誤りに地獄におちさせ給ふなど
いふ事あり上一人より下庶人に至る
まて孝は徳の本也昔者明王之以
レ孝ヲ治ム天下ヲ也云々孝経にみえたり
愛敬親につかうまつるに尽てり
徳教百姓にくは、り四海に刑す
る哥也これ梅か枝卷に浅緑き
こえこちし御めのとにもに納言に
のほりてみえんの御心ふか、るへし
と有し首尾也

「 71 丁オ

280

いかてかはかばかりのくまはなからん
おとなしやかに物をねたくおほす
心はなき紫上といへと式部卿宮
の北方のうけはしけに日比の給ひ
しにされはこそと思はれんか妬き
光君の御心さし女三宮よりまさ
りて有しよりけに浅からぬ御
中なりし能々心を付てみ侍へし
有さま一入哀を書つくして終に
しさより女三宮の入おはして後の
知といへり今までの紫上のらうく
して松柏の凋むに後ることを
の人ならては有かたし年寒く
にて貞節うるはしき事は有徳
の人ならては有かたし年寒く
して松柏の凋むに後ることを
しさを、たてやすし貧賤零落
人富貴自在なるほとは誰もみ
心つかひの本にすへきたためなるへし
入給ふ事をかけるは紫上の奇特
此巻に女三宮六条院の本台に
紫上おとなくしき御詞也すへて

「 72 丁ウ

「 70 丁ウ

「 72 丁オ

かり 明石上朝顔齋院などの

疑ひ有しかと終に事もなくて
過にければ今はざりともと御心
おちゐたるにと也細流云紫上

「 73 丁ウ

いまは本台に双ふ方なくみえし
にかやうの事出来ぬるは是則
盛者必衰の理あらはれ侍云

282 ことわつらひおほくいかめしき事は
むかしよりこのみ給はぬ御心にて

をこりを退け給ふ心也人の教也

283 なまはしたなくおほざるれとつれ
なくのみもてなして

これより以下の紫上の心はへ所々

皆世の女の見習ふへく書たる物

也よく／＼心えてみるへし

「 74 丁オ

284 さばかりのほとに成ぬる人はいとか
くはおはせぬ物をとめとまれとみぬ
やうにまきはしてやま給ひぬ

かやうにをくれ給へる所を尋常

の女は態其さかを見出し笑む

やうにのみすへきをおとなし

やかなる有さまかへりて光君の御

心さし添へき也みる人心すへし

「 74 丁ウ

285 さしならひめかれす見奉り給へる
年比よりも台の上の御有さまそ

猶有かたく 女三宮おはして紫

上に夜離むなど有て後弥光君

の御心さし添るさま也是にくけ

に妬み恨みたらんより猶まさ

れる夫の心さし帚木巻に

それにつけても憐まさるへし

おほくは我心もみる人からおさ

まりもすへしといへるに叶へる者にや

286 御返も時々につけて聞えかはし給ふ
朧月夜の尚侍貞心なき有さ

ま昔よりの本性改らざる心は

へを書てよにみくるしかるへきこ

とのいましめに書なるへし朱雀

院御遁世の、ちはかへりていささ

よくかやうの御返事なども絶

てこそあるへきに女の御有さま

の猶にこれる所有しより男

君もいひか、つらひ給て終に逢

みえ給ひし事又よのいましめなるへ

しもとよりつしやかなる所はお

はせさりし人といひえ心つよくも

「 75 丁オ

「 75 丁ウ

「 76 丁オ

もてなし給はずなとかける筆
誅の詞なるへし

287 なこりおほくのこりぬらん御物語の
とちめにはけに残りあらせまほし

きわざなめるを 尚侍の御こ、

「 76 丁ウ

ろ猶光君にはなれぬを中納言
見知たれは猶あはせまいらせたく

思ふ心也君君たらねは臣々たらぬ

有さま世人の心つけに書たるへし

288 女君さはかりならんと心え給へれと
おほめかしくもてなしておはす

前にも思ひあはせ給ふ事も

「 77 丁オ

あれと姫君の御ことの、ち
は何事もいと過ぬるかたの様さま

にはあらずすこし隔る心そひ

て見しらぬやうにておはすと

ありよのつねならはかやうの

こと今更にあるまじき事とも

諫め申給ふへけれと女三宮いり

給ひての後は隔て、見しらぬさ

「 77 丁ウ

まし給ふ也然とも猶光君心苦

しくおほす事を次の詞に中く
うちふすへなとし給へらんよりも

とかけり此とき声なきもこゑあ
るにまされりといへるたくひ堪能

の藝も賢女のふるまひもおもむ

きは同じかるへし心を付てみるへし

289 かくにくけなくさへ聞えかはし給へはこ
となをりてめやすくなん有ける

「 78 丁オ

紫上の心おさくしきゆへに万方め

やすく有しと也又人の教なるへし

290 いかめしき事は昔よりこのみ
前にいかめしき事は

給はぬ御心にてみなかへさい申給ふ
と有し首尾也此次にも世中の

煩ひならんこと更にせさせ給ふま

「 78 丁ウ

しくなんといなひ申給ふ事度々

になりぬれはと有

291 其としの二月のその夜の夢に
こ、にて明石上を心高く思初し事

の故を云也若紫すま明石等の巻に有

しことなり物語の書さま奇也こと

292 おと、の君のあなたにありと
明石上の心つかひ殊勝也又みせ

ならばせんの心としるへし

「 79 丁オ

293 よこさまにいみしきめをみた、よひし

も此人ひとりのためにこそ有けれ
須磨明石の両卷より紫式部石

山にて書初しといひつたふるも
此事ひとつの一部の趣向のもと

なりし故なるへし只今夜は十五夜
也けりといふはかりにはあらしかし

294 これは又具してたてまつるへき物侍り
下卷の住吉まうてあるへき微意也

295 さりやよくこそひけしにけれ

紫上の明石上をおとしめあなとる
心露もなくかへりてはまはゆき

まで数まへあへしらひ給ふに明石上
それにつのる心なく身のほとを

知てよろつ卑下し給ふ故紫上と
も中よく源氏君の御心にもよく

かなひてさなをし所なくたれも
物し給ふめれは心やすくなんと給へ

は明石上さりやよくこそ卑下し
にけれと思ひつ、けらる、也紫上

と明石上とのたかひの心むけ誠に
みならふへきところなり

296 おさくけさやかに物ふかくはみえず

女三宮の御かたの有さま也かやう

「 79 丁ウ

「 80 丁オ

「 80 丁ウ

の事のゆへに衛門督のあやまち
もいてきたるさまなり

297 女房なともおとなしくきはすくなく
おとなしく物馴たるは物ごとに

よく氣を付る故にあやまちすく
なしわかやかにされはめるは物ふか

きことなきゆへにつ、しむかたも
をろそか也猫のつなにみずをあけ

しを心つけさりし等のことあや
まちあるへき所なれば人の心得の

ためのをしへなり

298 かくことさまになり給へるはいと口おしく
むねいたきこ、ちすれは

衛門のかみかくあるましくおほけな
きことを思ひ初て終に女三宮の

御身をもいたつらになし奉り我
もあらはにはかなくなれり万人

の教にかけりよくく心をと、め
て見侍るへし悪をみては湯を

さくるかことくしてをそれつ、
しむへし私の心に任て我も悪を

知すしもあらずなからしむて
非をとくる事あるへからす

「 81 丁オ

「 81 丁ウ

299 おと、の君もとよりほい有ておほし
をきてたるかたにおもむき給は、
とたゆみなくおもひありきけり

「 82 丁オ

おさなきよりらうたく懇にし

おはしける光君の御ためにかく

うしろくらき心さしまことに身を

ほろほすへきたねなるへしかやうの

すちなき事一念も思ふへからす

300 みすのそはあらはに引あけられた
るをとみにひきなをす人もなし

「 82 丁ウ

女三宮の女房達若きはおほくお

となくしきはすくなかりしゆへ

物ことに心をつくる事なき有様

也又いましめにかくとみるへし

301 うちきすかたにて立給へる人
女三宮也前に夕霧のいとわか

おほとき給へる一すちにておさく

けさやかに物ふかくはみえずと思へ

りし首尾なり貴女のいましめ也

302 此人のかくのみ忘ぬ物にこと、ひ物し
給ふこそわつらはしく侍れ心くるしけなる

有さまも見給へあまる心もや添侍らん

女三宮おもくしくおく深くおは

「 83 丁オ

しまさはつかへ人の侍従もかやうには

え申ましくかつ此おほけなき文の

使をもえすましきにかろめ奉て

まさなき使をもしかやうにも申也

且又侍従まことの忠節の物ならば

たとひ女三宮は若々しくおはすとも

をのれたふとみてか、る使をもす

ましく侍るをおくふか、らぬ若人

にて物に心もつかぬ者なれば終に

あちきなき媒してわりなき折

の文をも遠慮なくみせ申てしと

ねの下にさしはさみ給へるはかなき

わさにしなし侍し高きも賤きも

見給ひあさみてつ、しみ侍るへし

若菜巻下

303(35) おほかたにてはおしくめてたしと思ひ
聞ゆる院の御ためなまゆかむ心やそ

ひにたらん

平生には安全永久と思ひ奉る光

君を女三宮に物申たき心あるよ

りとくほいとけて遁世をもし給へ

かしと思ふ悪心もそふと也若菜上

におと、の君もとよりほい有て

「 84 丁ウ

「 84 丁オ

おほしをきてたるかたにおもむき
給は、と思ひし事ある首尾也

「 85 丁オ

人の性は善なる物ながら氣質の偏
にひかれてかゝる悪念おこりやすし

其悪念のゆくすゑは人をそこなひ
国を乱し終に身をほろほし子孫を

も絶し侍るへしされは悪念心に

きさ、んはしめにをそれは、かり

て必思ひきり侍るへしあやまりて

は改るには、かる事なかれと日

日に思ひ出すへしもとより道に心

さして敬の一字を胸につけて悪

念あらしとおもはんものは天の道

にかなひて仏神の加護をもちう

ふり身を全く家久しくして誠

のたのしみあるへくこそ

304 われさへおもひつきぬるこ、ちす
夕霧の朋友に信ある心はせは

亦字間のゆへなるへし

これはさるわきまへ心もおさく侍らぬ物

なれと 衛門督女三宮をなひけ

まいらせまほしき心あるに東宮の此

猫の心のまたなつきかたきと仰

「 86 丁オ

らるゝをもうたておもひて是は
さやうの人をわく心も侍らぬ物と

いへるなるへし人情をよくうつし出

たる作り物語のさま奇妙にや

306 心の中にあなちにおこかましくかつは

おほゆ おこかましと思ひなからもなを

えやまで春宮よりめすにもまいら

せず取こめらるゝをろかなるさま

を書て又いましめとするなるへしすへ

て我かおこかましと知なから心をあさむ

きてあらためさる故に終に身をほろ

ほすにも至るへしおこかましと思ひ知

はしめにあらためてやまんを智とすへし

307 いみしく事ともそきすて、世の煩ひ

あるましくとはふかせ給へと

自由なるへき御身に猶儉約なる

こと光君の本性にて前にも其

心あり人の教とするへし

308 さるは尼君をはおなしくはしはのふは

かりに人めかしくて 老者をはやす

むし給ふ心はせを書て又教とする也

309 ことくしきさまならてわたり給ふへく
朱雀院の御賀あるへき微意也

「 87 丁ウ

「 86 丁ウ

「 87 丁オ

310 いとかく具しぬる人はよに久しからぬ
紫上物のけにわつらひ給ふ事此末
にありさやうの事かくへきため
にかけることは也

311 わかつみある心ちしてやみにしなく
さめに中宮をかく

かやうの御物かたりのゆへにつき
よりにて故六条の御息所の靈氣
紫上をなやましまいらせ給ふと
見せんためにかきし詞也

312 しはしこそいとあるましき事にいひ
返しけれ物ふかゝらぬわか人は
大事とあるへきことは初めより
取あへましき也小侍従心よはく取
あへて終に心ゆるひして女三宮の
御ためあちきなき事しいてたり
悪をみては湯をさくるかことくす
へし非礼勿聴なといふ事忘るましき也

313 ゆかのしもにいたきおろし奉るに
衛門督はしめはかくおほけなき
をしらせ奉らんはかりにと
文なとまいらせて只今も猶わか
心にもいとけしからぬことなれば

「 89 丁オ

けちかく中へ思ひみたる、事
もまさるへき事まては思ひもよら
すいみしきちかことをさへせしかと
かく近付まいらせては其つゝし
みも忘れ後の自他のためをも
かへりみすかくおほけなく成果
たり是世のすこし心ある者の
不善をなす事皆かくのことし
初めつゝしむ心あるも其所に
至りてはかくあちきなくなる
わさなればかねて思ひきりて
不善をつゝしめとの教なるへし

314 さかくおもひしつむる心もうせて
一たひつゝしみを忘るれば果々
はかやうにわか身もよにふるさま
ならず跡たえてなとまで思ふ
心になりゆくは世の不義をな
す男女のありさま皆かくのこと
くなればよく慎むへしとの心也
315 さてのみみしきあやまちしつる身
かなよにあらん事こそまはゆく成
ぬれとおそろしく空はつかしき
悪事をなせる人みな此後悔あ

「 89 丁ウ

「 90 丁オ

「 90 丁ウ

るへしそれもやかてあやまちを
あらためは今より後たに身安く
心のかなるへきにはしめも悪事
と我も知なからつみををかしたる
人なれば猶改めあへぬうちに
度かさなりて終に身をほろほ
すに至る事必せりかねて思ふへ
きいましめにかける詞なるへし

「 91 丁オ

316

世中しつかならぬくるまのをとなど
をよその事に聞て人やりならぬ
つれ／＼にくらしかたくおほゆ
賀茂の祭とて都の物見にする
ことも心にあやまちあれば興
なく冷しく覚ゆ是人のわざ
ならずわか悪をせし故なれば人や
りならずと書也よに悪をなし
たる人の心のをに、一生世ををち
をそれてよろつのためしみなく
なる事悪事をなせしゆへの大損
也恐るへくつ、しむへし

「 91 丁ウ

317

中宮の御ことにてもいとうれしく
前に此みやす所の事を紫上に
語り給へる所に中宮をかくとり

「 92 丁オ

たて、人の恨みをもしらすこ、
ろよせ奉るをあの世にても見な
をされなんとの給ひしゆへにいま
霊のかく申すなるへし

318

中宮にも此よしをつたえ聞え給へ
此御息所生てのよに人を妬み
苦しめ給ひしむくひに悪道に
おちて修法読経のたふとかるへ
きわさも身のくるしきほのをと
なると也誠に世の女の疾妬悪念
絶さる人にいましむる詞なるへし

「 92 丁ウ

319

よにかしこくおはする人もいとかく御
心まとふ事にあたりてはえしつめ給ぬ
たとひ心のまとはん時もよく心を
しつめて未練なるましきこと、の
いましめなるへし但こ、の心は紫
上を大切に思召さまをいふならし

「 93 丁オ

320

たちぬる月より物きこしめさてい
たくあをみそこなはれ給ふ
女三宮懐妊し給て悪疽の御気色
也彼柏木の夢に獣を見しもしる
きわさなるへし 男女の中の不
義は人しれぬ事と思へとかやうの

義は人しれぬ事と思へとかやうの

321 隠しかたく罪さりかたき事有
をそるへきいましめをかくなるへし
かの人もかくわたり給へりと大きくにおほ
けなく心あやまりしていみしき事と
もをかきつゝ、けてをこせ給へり

「 93 丁ウ

世の不義をなし悪事をなす人
はしめはみつからも不義悪事と
いふ事を知て随分に隠し忍ふと
すれとつので後は其憚をも
忘れて人めをもしゐてつゝ、み
あへすのみ成行てかく光君のお
はする時しもねたく心やましく
さへ成てさま／＼書つゝ、けて文をま
いらせしをろかなるわさを心あや
まりしてといふなるへしさて顕れ
ての千悔万悔何のかひあらん法に
あらずはする事なかれと戒る心にや
322 さしはさみしをわすれにけり
かやうの大事を忘れ給はんとは侍
従もしらし柏木もしり給はしなを
女三宮みつからもしり給ふまし然とも
忘るゝといふ事人に在て顕れまし
きと思ふ事も不意にあらはるゝ、

「 94 丁ウ

習ひある事を書いて世人に不義
不法をなしてあらはれましきと
思ふ事なかれみる事きくこと
いふ事うこく事にも法にあらすは
すましきとはしめよりつゝ、しみをそ
るへしとのをしへにかくなるへし
323 故院のうへもかく御心にはしろしめして
やしらすかほをつくらせ給ひけん
薄雲の御ことのむくひにてか
やうの事あるにやと柏木巻に
薫の生れ給ふ所に光君おほし知
ける事あり世界の因果の道
理をかきて悪事をいましめ侍る也

「 95 丁オ

「 95 丁ウ

324 いとあさましくいつのほとにさる事
出来けん よもあらはれしと思ふこ
との今更悔てかひなき有さまを
書しるして兼て用心すへきい
ましめとすかやうの事を柏木の
身の上とみればよその事のやう
なれとも是は作り物語にて世間
のありさまをかける物なれば面々
身の上の事と思ひて外の事
とは見るへからす

「 96 丁オ

325 かの御心よはさもすこしかるく思ひ
なされ給ひけり

「 96 丁ウ

朧月夜も玉かつらにくらへてかろ
かるしきを見おとし給ふ也女のか
ろくしきをいましめし詞なり

326 おと、母北のかたおほしきはきて
柏木のまさなき心あやまりに

父母のうれへにさへなりて不孝
のつみさへ浅からぬ有さま也論
語に父母はた、其病のみを

「 97 丁オ

うれふといへり父母いますとき
は友にゆるすに死をもてせず
ともあり身を心にまかせて

あたるわさに身をかへりみぬ
やうの事君子のせさる所也
すこし心あらん士子心すへき所也

柏木卷

327(36) 後の世のをこなひにほいふかくす、み
にしを親たちの御恨みを思ひて

「 97 丁ウ

衛門督も父母の孝心にて発心をも
思ひとまるまでの遠慮は有けれど
誠の心さしなく敬を忘ぬまではあ
らぬあやまりに女三宮をしたふは

不義不忠不信なるとのつ、しみな
かりしゆへ終に身をかるくしく

あやなき恋路にたはれて身をわ
つらひ身をほろほして父母の不孝
に至る有さまをかきて皆人如此の

「 98 丁オ

328 われより外に誰かはつらき心つから
もてそこなひつるにこそあめれと思ふ
にうらむへき人もなし

悪人の悪をなすも悪とはみつから
もしれと人はしらしと思ひて心を

あさむきて悪をなしてもし幸に
まぬかれても安き空なく恐る心

「 98 丁ウ

絶せすは何のまぬかれしかひあらん
まして其悪あらはれて身をいた
つらになすらん時はいかにくやくしく侍る

へきされはかりにも悪をなすへからす
悪をなして其とかをかうふり身を
ほろほすにいたりては人々みなこの
柏木衛門のかみにことならずとしら

「 99 丁オ

せんためにかける詞なるへしこ、
ろつからもてそこなふといふ事心を
つくへし一念ひるかへして心つから

善をなさは此恨みなく悔みなく一
生必身安楽なるへきものを
329 おと、などのおほしたるけしきぞ
いみしきやきのふけふすこしよろしか
りつるをなとかいとよはけにはみえ給ふ
とさはき給ふ

「 99 丁ウ

親として子の病ひをうれふる
はいかに堪かたく悲しかるへきに
其うれへを親にかけなからひ
そかにやをらすへりいて、侍従
とかたらひて病ひを重くして
又かくさはかしまいらすること
不孝のうへの不孝なるへし他の
ふるまひにも此たくひの事有と
いへとわきてかやうのわりなき
恋路に親にしらせず身をぬす
み出て我身もくるしめ親にな
けきをかくる事あるましき事也
330 さてあやしやわかよと、もに
おそろしと思ひし事のむくひなめり
藤壺の御事を光君思ひあた
り給へるさま也細流にも此物語
一切のむくひをかけりとあり

「 100 丁ウ

「 100 丁オ

まことに因果の理まぬかれぬ
ことなれば悪事をつゝしむへき
也臙月夜尚侍は兄嫂也その
むくひはすまの愁あり藤壺の
御事は終に世にしられず其
難もなかりしかと又かゝるむ
くひをかきて光君みつからお
もひあたり給へるさまを書たる
は不善不義のふるまひを世人
にいましむる心とするへし
331 久しうわつらひ給ふほどよりはこと
にいたうもそこなはれ給はさりけり
をもき病者に逢ての愛摺

「 101 丁オ

かくあるへき事なり行幸巻に
大宮の御煩ひを光君おはしとふ
らひ給ふ詞にも此心つかひあり
332 おやにもつかふまつりさしていま
さらに御心ともをなやまし君に
つかふまつる事もなかはのほどにて
今更にといふ詞心を付へし親の
子をおふしたつる事むつきの内
よりあけまきのほといくはくの
苦勞にて成人の、ち彼おさなき

「 102 丁オ

「 101 丁ウ

ほとどの御心つくしすこし休めぬ
へき、さみとなりて又今更に病
のうれへをかけさきたちて死

333

なんさかさまの歎きをかくると
の心也柏木の身をつゝしまぬ心
一つにて不孝不忠のつみふかきこ
とをかきて人の子人の臣としては
身を全くすへきいましめをいふにや
いまはのほとにも給ひをくこと

「
102
丁ウ

侍しかは 前に柏木的一条に物し給ふ
宮ことにふれてとふらひ給へたと
夕霧に遺言せられし事也此
心にてとふらひ給ふはまことの朋友
の信なるへしたひかさなりて

後女二宮の有さまゆかしく思ひ
なり給ひてまめ人の名をも終に
はくたし給へり心あるへきことの
をしへなり

「
103
丁オ

334
か的一条の宮にもつねにとふらひ
聞え給ふ 女の御あたりには

道に心ある人はさるへき故有
ともさのみはちかつくましき
ことの心つかひのためにかくなるへ

「
103
丁ウ

し人非木石皆有情不如不逢
傾城色と白楽天の作りしいま
しめよくくおもふへしかくたひく

とふらひ給ひて其ありさまを
み給ふにつけて此宮こそは聞きし
よりは心のおくみえ給へかたちそ

いとまほにはえ物し給ふましけ
れといと見くるしうかたはらいたき

ほとにたにあらすはなともおも
ひより給ふ也心つかひあるへき
こと也

（遊紙2丁）

「
104
丁ウ

〔附記〕

本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・翻刻・複写
等にご高配を賜りました各所蔵機関、『源氏物語微意』
の閲覧・翻刻をお許しくださいました日本大学総合学
術情報センター、ご所蔵の『為尹卿千首和歌題抄』に
ついて、ご教示および閲覧・複写の機会を賜りました
佐々木孝浩先生に深謝申し上げます。

（みやがわ・しんや 本学大学院博士後期課程）